

『下学集』の典拠資料と関連資料〔二〕

木村 晟

一、はじめに

『節用集』は当初の「伊勢本」成立の際にも、また「印度本」に成長した際にも、『下学集』を主要典拠の一つとして編纂されてゐる。従つて『節用集』諸本の組織や注文の典拠を調査するにも、古本系統の『下学集』に原拠が得られれば、事は済んだこととなる。しかしながら、その依拠する『下学集』の標出字や語注の原拠は何かといふことは、殆んど問はれることなく時が経過して来たやうに思へる。それ以前に『下学集』が如何なる言語生活上の欲求に基づいて編纂されたかといふ問ひさへもなされることは少なかつたやうに思はれる。長めの語注を比較的多く具有せるがゆゑに、「読む辞書」との謂ひがなされることも稀にあつた。けれどもしかし熟々考へてみるに、辞書を読むのは「手段」であつて、「目的」ではない。全ての辞書は「読解と表現」の何らかの営みのために資すべく編纂されるものである。さすれば『下学集』は言語生活上の如何なる必要のために編まれたものであるかを考慮せねば、『下学集』研究は爾後の一步を進め得ないであらう。それがためには、まづ『下学集』が誰に拠つて如何なる典拠を基幹として編修されたものであるかといふ基本的な調査から実施せねばならぬであらう。

その『下学集』は文安元年（一四四四）に、五山の一、建仁寺靈洞院の東麓軒（註1）（寛正三年へ一四六二）頃廢庵）

の住僧によつて編纂されたことは、その「序」によつて明らかである。問題は五山の禅僧たる編者が何故『下学集』といふ比較的簡便で、禅林文芸の創作活動には安直に過ぎる辞書を編んだかといふ疑問に答へ得るか否かにかかる。それがためには五山関係の記録類や公家衆の日記類の関連記事によつても、『下学集』編修に到る必然性を探索しなくてはなるまい。第一の五山衆の日録、例へば『蔭涼軒日録』や『鹿苑日録』に拠る限り、『下学集』編纂を直接に証明するやうな関連記事は見出せない。第二の公家衆や博士家の日記録に『下学集』編纂の事情を示す記事も見られぬが、『下学集』を持参したり所望したりする記事は、『実隆公記』（文明十一年へ一四七九）九月二七日条・享祿二年へ一五二九）二月九日条）や『宣胤卿記』（永正一四年へ一五一七）二月二一日条）、さらに『山科家札記』（文明三年へ一四七一）一二月一〇日条）等の記事に具体的に見られる。特に『実隆公記』の文明十一年九月二七日条の記載には、『下学集』と『聚分韻略』とが併記されてゐることに注目させられる。蓋し『下学集』が五山衆や博士家の学問所などで、ある種の文芸の営為のために、『聚分韻略』と併用されたといふ帰結を得ることになるのである。

五山叢林においては、漢詩・聯句等の作文のために、『韻府群玉』『古今韻会举要』等の中国の韻書や、『事文類聚』『太平広記』『太平御覧』等の類書群が使用されることは謂ふまでもない。而かるに公家社会や博士家の学問所、あるいは連歌師等の詩聯の実作の参考書としては孰れの韻書が利用されて来たか。この問ひに対して吾人は以前に次のごとき仮説を設定した。畢竟『下学集』は公家衆や博士家の学問所、さらには武家衆のためにも役立つやうな、詩聯の制作のために編纂されたものである。従つて本書は中世後期に禅林・公家・武家の三社会が融合して、特に五山衆と公家衆との交流が「聯句連歌^{註2}」といふ文芸を具として実際に行はれたことにより、その創作活動の欲求を満たすために編修された辞書であると考へるに到つたのである。具体的に聯句連歌のうち、「和漢聯句」の創作に

関する記事は義堂周信（正中二年へ一三二五）と嘉応二年へ一三八八）の日録『空華日用工夫略集』に既に見られる。この日録に拠れば『下学集』成立の頃には和漢聯句よりも規定を一層厳しくした「漢和聯句」といふ形式の言語遊戯も五山衆と公家衆との交流の場で催されてゐる。この聯句連歌の実作のためには、五山衆は別として、公家衆にとつては中国の韻書『広韻』『集韻』『増韻』や『韻府群玉』『古今韻会举要』等を実際に使用するには難事に過ぎる。その点で『聚分韻略』は公家衆にも好んで用ゐられたが、この韻書は単字の標出語となつてゐる上、短い注記しか有してゐない。漢詩・聯句の作文に際しての「聯想」のためには、必要に応じて長めの語注が必須のものとなつて来る。かと言つて『事文類聚』『太平広記』のごとき浩瀚本では検索が容易でない。斯様な日本版の簡易類書（小型百科全書）と、語句を選択するに役立つ言語辞書とを併合した形態の一つの辞書として、『下学集』は誕生した。さうして文明期以降の聯句連歌の盛行に付随して『下学集』使用の頻度は頓に高まり、多種の伝本が簇出する結果となる。元和三年（一六一七）には刊本ともなつて上梓され、以後続刊・重刊され続けたのである。

屢説するまでもなく『下学集』の語注は多くの和漢の典籍に依拠して成つてゐる。今般吾人は、特に漢籍の典拠に限定して逐条調査を実施することとした。その概略を略注の形式を採つて記載することとした。和書・国書の典拠についても今後調査を続行する予定である。調査は主として『亀田本』に基づくことを原則とした。『下学集』の伝本系統を明確にすることは容易ではない。現存全ての伝本を悉皆調査せねば果たせぬことである。而かるに諸本分類の鍵を握る程重要な二、三の伝本を未だ見得られないでゐる。今は取り敢へず『亀田本』に依拠することとした。『亀田本』は文明六年（一四七四）以降成立の『広本節用集』所引の「下学集」の本文に最も近似してゐることを確認し得る所以である。

注1 木村晟「聯句連歌の辞書と関連資料」（『駒澤大学文学部研究紀要』第59号二〇〇一年3月刊）参照。

注2 木村晟・辜玉茹共編『聯句連歌の研究 資料篇』（『古辞書研究文献』2 二〇〇一年6月港の人刊）に「漢和聯句」を一一件、「和漢聯句」を一二件、計二三件を翻字収録。

二、『下学集』の漢籍典故

(一)「草木門 第十四」

「草木門」(第十四)の写本平均収録語数は230語である。『龜田本』によりI-Vの語群に分けて、漢文注の中、特に多くを『韻府』と『事文』に依拠すると思はれるものを採り挙げて記す。

I 花木名 (1優曇華……28薄)

2 牡丹 一ノ名一捻紅 又ノ名鼠如日本俗云二十日草 又云名取草 元和版には又云百両金 又云鹿韭 鹿を付す。

『韻府』に「牡丹 本草 一名百両金 一名鼠姑 一名鹿韭 唐人謂本芍薬」、「楊家紅者 貴妃匀面脂 在手印花上来歳 花開上有指印紅 迹帝名為一捻紅 (責瑣高議)」とあり、『下学集』の語注はこれに依拠したと考へられる。『事文』には「唐人謂之木芍薬」とあるが、異名を掲げず。『太平御覧』に「本草経曰 牡丹 一名鹿韭 一名鼠姑 味辛寒生 山谷寒(下略)」と見られるが、異名に「鹿韭」「鼠姑」を挙ぐるのみにて「一捻紅」は存せず。『事物紀原』には「一捻紅」が存する。なほ『元和版』は注文末尾に補入する場合にも『韻府』に拠つてゐることが判る。『合璧事類』に「牡丹 花之富貴者也 按本草 一名鹿韭 一名鼠姑」とある。本邦の『本草和名』にも「牡丹 一名鹿韭 一名百両金 一名白朮 和名 布加美久佐 一名也末多知波奈」と見受けられる。「和名」の「二十日草」は『蔵玉集』に「不加見草 牡丹 此花さく日数廿日也 依廿日草とも号す」、「名取艸 牡丹」と見られる。

3 芍藥 異名將離花 又云可離花 唐李群玉句云——花開菩薩面 与下ノ櫻櫚——注一對ノ句也

『韻府』に「藥」「花木」芍藥 又名將離 故將別贈（本草）、「芍藥 古今注芍藥 一名可離」、「夜叉頭 芍藥 花開菩薩面 櫻櫚葉散——」（李群玉詩）とあり、『下学集』の語注に一致する。「夜叉頭」の記事は『合璧事類』にも存

せり。『事文』は「贈之以芍藥（溱洧）」とあるが、『下学集』に一致せず。『太平御覽』も同断。『芸文』は異名「將離」を有す。因みに『下学集』の「草木門」の「202 櫻櫚」の注記に「唐李群玉詩——葉散 夜叉頭」とある。「芍藥」の注文末尾部分「与下ノ櫻櫚——注一對ノ句也」はこれを指すか。

4 芝蘭 二ツ香草ニシテ可貴也 然ルニ日本ノ俗呼レテ芝ヲ 為スルニ原野ノ短キ草ト者不レ得ニ其ノ理ヲ欤

『韻府』に「芝 説文神草也 服之神仙 如入——蘭之室」、「蘭 俗呼燕尾香 山谷曰 一榦一花而香有餘者 一榦数花而香不足者蕙」、「芝蘭 與善人居 如入——之室」とある。『事文』には「蘭 香草也（説文） 楚人曰蕙者」、「芝蘭 生於深林 不以無人而不芳（家語）」とある。

7 蕙莢 堯帝ノ時ニ 此ノ草毎月朔ニ 生ス一葉一ヲ 乃至十五日ニ 生ス十五葉一ヲ 十六日以後ハ 毎日ニ落ス一葉一ヲ 月若シ小盡スル 則シハ 一葉不レ落チ 視ニ此ノ草ヲ 以テ識ニル 晦ヨリ朔一ヲ 堯階ノ莢是レ也

『韻府』に「蕙莢 堯——毎月朔日 生——至十六日 日落一莢」、「堯莢——時——莢 毎月朔生一莢 月半生十五莢 望後 日落一莢（帝王世紀） 月小盡則 一葉不落 觀之以知晦朔（通曆）」とあり、『下学集』がこれに依拠したことが考へられる。ただし『事文』も「蕙莢草 堯時 有草生庭 十五日已前 日生一葉 十五日已後 日落一葉 若小盡則 一葉厭而不落 名曰蕙莢 堯觀之 以知旬朔（馬抱曆）」と略同注である。『下学集』は、『韻府』『事文』の孰れかに拠つたことは明白。

9 蘇籐 日本ニ所謂ハ山吹是也 暮春有花也 日本ノ俗呼ニ欵冬一ヲ 謂フ山吹ト者誤也

10 欵冬 枳莖菜也 本草ニ云ク——ハ十二月ニ有花 其ノ色黄ニ 或ハ紫ナリ 其ノ味苦キ也 三體記ニ曰ク 僧房ニ逢著ス——

花出^レ寺^ヲ吟^行ス^レハ 日已^ニ斜^{ナリ} 十二街中 春雪遍^シ 馬蹄今去^テ 入^ニ誰家^{ニカ} 按^ニス^ルニ 此^ノ詩^ヲ 十二月ノ花至^ル春雪ノ時分^ニ也 然^ルニ我朝ノ朗詠集 清慎公ノ詩^ニ云ク 欵冬誤^テ 綻^フ暮春ノ風^ニ 何^ソ哉 所詮^ニ日本ノ俗皆以^テ山吹^ニ 謂^{ヘリ}——ト 山吹^ハ即^チ醜^醜也 其^ノ色黄^{ニシテ} 而如^ニ緑酒^ノ 清慎公^モ亦^タ誤^{ニテ}醜^醜 謂^リ——ト 欵^其ノ詩^ノ意^ロニ云ク 此^ノ花名^已是^レ——何^シ 綻^ニト暮春ノ風^ニ乎^ト 咎^{ニテ}——ノ之字^一 而云^フ尔耳 詔^ノ意^ロ雖^レ工^{ナリ}ト 用^{コト}故事^ヲ誤^矣 辨^レス之

と『下学集』は抄物風の詳注にする。『韻府』には「醜醜 花名一穎三葉 魯端伯十友——韻友 亦作茶蘼（山谷詩）」とある。『芸文』は「欵冬 十二月花黄白 吳晋本草」と注する。『事文』には「醜醜 不爭春寂寞開晚 青蛟走玉骨（下略）」などとあるが、『下学集』はこれらを引用することをせず、『和漢朗詠集』の詩や『塵袋』の説などを参照して独自に注したものを目せられる。委しくは続稿に譲る。ただし『下学集』に引く『三體詩』と『和漢朗詠集』の原文を次に掲げる。「僧房逢着欵冬花 出寺吟行日已斜 十二街中春雪遍 馬蹄今去入誰家」（三體詩）、「點着雌黄天有意 欵冬誤綻暮春風」（和漢朗詠集・一七・欵冬136）。文安一年（一四四五）成立の『堪囊抄』は『下学集』の語注を承けてゐる。

13 葵 又云一丈紅^ト 此花畏^レ日^ヲ 以^レ葉^ヲ 衛^ル其^ノ足^一也 左伝^ニ云ク 鮑莊^カ之智^ハ 不^レ如^レ葵^ニ 々^ハ猶^ラ能^ク衛^ル其^ノ足^一 此^時鮑莊^犯罪^ヲ 遣^レ別^レ足^ヲ 故^ニ云^フ尔^カ也

『韻府』には「蜀葵 花如朱槿 白黄紅紫 背有紅者 又號一丈紅」、「紅」[草木] 鴈來——葉如花一丈——葵（壯元）、「鮑莊之智 不如葵 葵能——其——（左）」とあり、『下学集』がこれを承けてゐることは決定的である。『芸文』や『太平御覽』等にも略同注を見るが、異名「一丈紅」は存せず。

16 萱草 又云忘憂中 或^ハ作^テ諼^レ忘^レ憂^ヲ

『韻府』に「萱 亦名療愁 忘憂 宜男草 紫萱 萱草 一名——」、「萱草花——不 一曰宜男者 懷妊佩之生男曰

忘憂者 令人志憂 有紅黃紫三種 又名鳳頭者 尤佳 (格物聚話) 』とある。『事文』には「萱草花 萱忘草也 説文 其葉

四垂 其跗六出 亦曰宜男嘉名斯言 果江必草賦、一名忘憂 欲蠲人之忿 則贈 以青裳 一名合歡 (下略) 』等とあり、

『下学集』が『韻府』『事文』の孰れに依拠したとするも可である。『太平御覽』に類似せる注記あれども、『韻府』

『事文』の方、『下学集』に近し。『合璧事類』は「忘草 神農經曰 中藥養性 萱草——— 博物志 』と注せり。『書叙

指南』には「忘憂草 名曰萱草」とある。

17 水仙花 馮夷草 陰人服 レコト 花 ヲ 八石 得 レタリ 為 ニ——— ト 見 ニ韻府 ニ 又 涪 蟠 山 谷 カ 云 ク 含 ミ香 體 シテ 素 ヲ 欲 傾 レ城 ヲ 山 礬 ハ

是 レ弟 ト 梅 ハ 是 兄 又 日 本 ニ名 ケテ 曰 ニ雪 中 花 ト 也

『韻府』に「仙 [草木] 水—花 (中略) 馮夷草 陰人服花八石 得水仙 名河伯 (清冷伝) (中略) 含香體素 欲傾城

山礬是弟 梅是兄 (谷) 』と、『下学集』の注文にさながらに一致する。『下学集』が「韻府」と出典明記せる所以で

ある。『事文』に「詠水仙花 陳去非」、「賦水仙花 朱元晦」、「水仙花 黃黒直」等々、数多の詩聯の用例を挙げる。

『合璧事類』にも「清冷伝」の記事の引用あり。

18 蒲萄 其 ノ 汁 可 シ 釀 ス 酒 ヲ 一 ノ 名 ニ 馬 乳 其 ノ 實 形 如 ニ 馬 乳 ト 也 退 之 カ 句 ニ 云 ク 若 シ 欲 セ 滿 盤 ニ 堆 ニ 馬 乳 ト 莫 レ 辞 ス ル 接 竹

引 コト ヲ 龍 顔 ト

『韻府』は「蒲萄 一名馬乳 又水晶 張騫使西城得之 汁可釀酒 龜茲國家至千石 (異国録) (中略) 賜——— 不拳曰

臣母病 求不能 致願奉之 若欲滿盤堆馬乳 莫辞接竹引龍顔 (韓) 』とあり、『下学集』がこれに拠つたことが判る。

『事文』にも「葡萄 韓愈」の「新莖未徧半猶枯 高袞支離倒後袂 若欲滿盤堆馬乳 莫辞添竹引龍顔」を引用す

る。ただし「其汁可釀酒……如馬乳也」に該当する箇所が存せず。『太平御覽』に、『韻府』と類似する注

記あるが、韓愈の詩の引用なし。『合璧事類』には「格物総論」に「其汁可以釀酒 一名馬乳 或亦名水晶 皆此

物」。「満盤堆」に「新葦……若欲——馬乳 莫辞接竹韻龍鬚 韓愈」と見られる。『下学集』が宋代の『合璧事類』を参照した可能性も十分に考へられる。

29 薄 韻府ニ曰ク 木ヲ曰レ林ト 草ヲ曰レ林ト 草ヲ曰薄ト 故曰叢薄ト誤也

『韻府』に「叢薄 木曰林 草曰薄故曰——」とある。『下学集』はこれを承け、かつ「誤也」と評する。「韻府」と明記する処からも、『下学集』の漢籍出典の主要なものとして『韻府』を使用したことは明白である。

II 五辛類 (30 大蒜……35 蓴菜) は六語である。

30 大蒜 31 茗葱 32 薤葱 33 蘭葱 34 興渠 以上五辛也 —— 不知何草ト云ト 或ハ云葱蒨ト 或ハ云大根ト 雖モ有リト諸注ニ 不分明ナラ也

『韻府』に見られず。『小学紺珠』に「五菜 葵 藿 薤 葱 韭」とある。『事文』には「蔬菜」の中に「張騫 奉使還始得大蒜苜蓿」、また「菜 則葱韭蒜芋青笋紫姜董齊甘旨蓼葵芬芳囊荷(下略)」のごとく纏めてゐる。『下学集』は、類書群に諸説あれど「分明ならず」と評する。

35 蓴菜 晋ノ張翰 因テ秋風ノ起ルニ 思フ吳中——ノ羹 鮪魚ノ膾ヲ

『韻府』は「秋風菰 齊王問辟張翰 為大司馬東曹掾 因——起 思吳中——菜蓴羹 鱸魚膾(下略)」とある。『韻府』に引用文の典拠名を記さぬが、『下学集』に「晋ノ張翰」とすることく『晋書』の「張翰伝」に基づくものである。この故事は『蒙求』に「張翰適意」として掲げる。『事文』には「張翰伝」の故事は見られず、『太平御覧』は「蓴」「囊荷」の項に引用が見られるものの「晋書」の出典名は存せず。『合璧事類』は「張翰思」の項に存せり。

III 菓物・草花・野草・藥草・蔬菜類 (36 覆盆子……101 苜) 蔬菜名は IV にも混在する。

42 菱 角草

『韻府』に「菱 俗作菱 菱也 (武陵記) (中略) 四角三角曰菱 兩角曰——」とある。『事文』には「菱陵也 說文」、「菱生軟角」、「菱翻紫角用利」とある。

43 蘭 織_レ席_ラ草 為_二疊_ノ面_一

『韻府』には「荔草名 即馬蘭 (上林賦) 箴折苞——苞麗 可作席——馬蘭也 (下略)」とある。

50 藍 染草

『韻府』に「藍 [說文] 染青草」とある。

59 枸杞

『韻府』に「枸杞 名青精子却老枝地骨皮 仙人杖 地輔枸杞」とある。

『事文』には「枸杞 久服輕身不老 一名仙人杖 本草」とある。『元和版』は異名「仙人杖」を標出語として「59 枸杞」の次に立項する。『合璧事類』にも「枸杞 一名仙人杖」がある。

64 茯苓 松ノ露入_レ地 千歲_ニ化_{シテ}成_二——_一ト 神仙傳_ニ云ク 五万日服_ニスレハ——_一ヲ 必_ス得_レ仙_ヲ

『韻府』には「茯苓 黄初平見棄家服——五萬日遂得仙 (神仙傳) 松栢脂 入地千歲化——」とある。『事文』には「松脂淪入地中 千歲為茯苓」とある。『太平御覽』は「神仙傳曰 皇初起以弟(中略)松栢茯苓 至五萬日能坐在立」、「典術 茯苓者松脂入地 千歲為茯苓」となつてゐる。『韻府』の方が『下学集』の注文に近い。

70 甘草 71 國老 甘_ノ中_ノ異名也 言_ハ若_シ藥_ヲ與_レ藥_ヲ投_合スル_ニ 相_敵シテ_成毒_ヲ時_以ニ_甘中_一ヲ_加レ_ハ之_ヲ 則_レ兩_藥和_合シテ_不成_サ

害_一云_ク 故_ニ一_切ノ_藥ニ_必加_ニ甘_草也 喻_フ之_レヲ 兩_國相_敵シテ_成害_ヲ時_有ニ_國老_一和_睦スル_之ヲ 則_レ不_レ成_サ害_也 見_ニ

『韻府』に「國老 甘草名——謂諸藥中為君也（本草）」と見られる。『事文』には存せぬが、『太平御覽』に「本草經曰 甘草一名美草 一名蜜甘」と異名を列挙する。

72 甘蔗 啖ハ愈キ甘キ味也 又ク釈迦ヲ為ス甘蔗氏ト「元和版」に注冒頭の「啖ハ……味也」が存せず、その部分に「顧愷之每ニ食フ蔗ヲ 自リ尾至本ニ 曰漸ク入ル佳境ニ」が存する。

『韻府』に「倒餐蔗 顧愷之每食蔗 自尾至本 曰漸入佳境」と、『元和版』に補入せる箇所がさながらに見られる。ここも『元和版』が『韻府』に基づいた証左を示す記事となつてゐる。ただし『事文』にも「漸入佳境 顧凱之為虎頭將軍 每啖蔗 自尾至本 人或問之曰 漸入佳境」と類似した記事になつてゐる。「食」を「啖」に作る。『合璧事類』も「愷之食蔗顧——為虎頭將軍每——自尾至中 或問曰 漸入佳境世説」と略同の注記である。『太平御覽』も略同注であるが、冒頭に「晋書曰」と典拠名を記してゐる。

82 薯蕷 山ノ芋也 又ハ云ニ蕷藥ト 又ハ云ニ山藥ト 趙宋ノ時 兩度去ク諱ヲ 故有ニ多名ト

『韻府』には「蕷 諸——本作蕷「統」作薯——（杜） 充腸多諸——」とある。『事文』には「生於山者 名山藥 秦楚名玉延」と見られる。『事物起原』にも「山藥 即本草 所謂薯蕷者」と注する。本邦の『本草和名』にも「薯蕷一名山芋 秦楚名玉延」鄭越名ニ土諸音諸一名土茶根 一名芋茶根已上二名 一名諸署 一名王廷（下略）」とある。

92 莧 候澗ノ反——与驚不可レ合食ス——ノ葉ニ裹テ驚甲一ヲ 以テ土ヲ覆レ之ヲ 宿變シテ為レ驚

『韻府』に「莧 候欄切 有馬齒鼠齒糖——○又有赤白紫紅人——（本草）——驚 不可同食——菜裹驚甲 以土覆之一 宿變為驚」とあつて、『下学集』の語注の典拠となつてゐることは明白である。『合璧事類』には「驚化 不可以莧菜 与驚同食 則生——癥試 以驚甲 如豆片大者 以莧葉封果之 置於土坑内上 以土盖之一 宿盡變成驚也」と『韻

府』と類似する注が見られる。

IV 穀類・蔬菜・海草・菌類・植木・菓物類（102 麥……178 銀杏）

112 蕒 魏ノ曹子建^カ七步ノ詩^ニ 煮^レ豆^ヲ 燒^ク豆^ヲ 其^ヲ 豆^ハ在^ニ釜中^ニ 泣^ク本^ト是同根^{ヨリ} 生^ス 相煎^ルコト 何^ソ太^タ急^{ナル}

『韻府』には「燃其煮豆 魏文帝 令曹子建 七步作詩不成行 大法応声曰煮豆 燃豆其豆在釜中泣云（魏志）」とあり、『事文』にも「煮豆燃其 魏文帝 令東阿王 七步中作詩不成者 応大法応声曰煮豆 燃豆其豆在釜中 泣本是同根 生相煎 何太急」と略同注である。「魏ノ曹子建^カ」の部分は『韻府』に近いが、「泣^ク本^ト 是同根^{ヨリ} 生^ス 相煎^ルコト 何^ソ太^タ急^{ナル}」の部分は『韻府』になく、『事文』と一致する。因みに『事文』の「東阿王」（曹植）は魏の文帝（曹子）の弟である。俗に「曹植七步詩」の故事として通行せり。『太平御覧』も略同注文を『世説』より引用する。

『合璧事類』には「煮以作羹 魏陳思王 曹植字子建 文帝同母 嘗令王 七步中作詩不成者行大法 応声為 詩曰—— 豆—— 漉菽以為汁 其在釜中 然豆在釜中 泣本是同根 生相煎 何太急（魏志）」と委しい注記が見られる。

115 瓜 或^ハ作^ス菘 116 蜜筒 甘瓜ノ異名 117 青門 118 東門 共^ニ瓜ノ異名也 秦ノ東陵侯 種^フ瓜^ヲ 長^ク安^ク東^ニ瓜^ニ有^リ五色^ニ 甚^ク美^{ナリ} 謂^フ之^ヲ青^ク門^ノ瓜^ニ也

『韻府』には「東陵瓜 秦東陵侯 種瓜長安城東 瓜有五色 甚美 謂之—— 又曰青門瓜（蕭何伝）」と『下学集』の語注にさながらに一致する。『事文』は「東陵種瓜 邵平故秦東陵侯 秦滅後為布衣 種瓜長安城東 種瓜有五色 甚美 故世謂之東陵瓜 又云青門瓜 青門即東陵也 史」と見られる。『太平御覧』も「史記曰邵平者 故秦東陵侯 秦破為布衣貧 種瓜長安城東 瓜美 故世謂東陵瓜」と『史記』を引き、類似せる注記になつてゐるが、『合璧事類』は『韻府』と同じ「蕭何伝」からの引用である。『事林広記』には「五色瓜 吳相王時會稽 生五色瓜」、「東陵 邵平乃秦東陵侯 秦破

為貧種瓜于東陵」、「青門瓜」昔聞東陵瓜近在青門外也」の他、「同蒂瓜」、「神靈瓜」、「青登瓜」、「温良瓜」、「桂皮瓜」、「秋泉瓜」、「龍肝瓜」、「獸掌瓜」、「羊骸瓜」、「兔頭瓜」、「武陵瓜」等多く「瓜」の異名を掲げる。本邦鎌倉時代の『玉造小町壯衰書』にも「東門五色菘」の引用が見受けられる。

123 蔦 124 蘿 二字義同 毛詩蔦与女

『韻府』に「蔦 寄生草(詩)——與女蘿 一名兔絲」、「蘿 青而細長 無雜蔓」、「女蘿 蔦與——(詩頗弁) 在木為——在草為兔絲」と『毛詩』の引例が存する。『太平御覽』は「女蘿 毛詩頗弁曰 蔦與女蘿 施于松柏蔦寄生也 蘿菟絲也 松蘿也」と注する。

145 棟 音ハ鍊 歲時記ニ云ク 凡一年中ニ花信ノ風二十四番 始リテ于梅花ニ 終ル于棟花ニ 日本ノ俗作レ樗ニ 或ハ名ク雲見草ト也 子ヲ以テ可レ洗レ衣ヲ也 ——日本ニケヤケト云ニ云ク 又アウチハ梅檀トモ云ナリ

『韻府』に「棟」〔説文〕木也 苦——鵝雛食 其實亦名金鈴子(唐詩) 二十四番花信風——花風其終也」、「花信風始梅花終棟花風二十四番——(歲時記)」とある。

146 石榴 取レ汁ヲ 入レ盃中ニ 經テ數日ヲ 成ニ美酒ト

『韻府』に「榴實 取——汁 停杯中 數日 成美酒(扶南伝)」とある。『事文』には「若榴 石榴也廣雅」とあり、「石榴」の項に『下学集』の注文に相当するものなし。『太平御覽』も同断。『合璧事類』はやはり『扶南伝』の引用で、「醞成美酒 頼孫國有安石榴 取汁停盃中 數日 成美酒扶南伝」

148 海棠 杜子美カ母ノ名ハ棠 故ニ詩中ニ不レ言ニ海棠ヲ 句ニ云ク 曉キ看ル紅湿フ 処ニ花ハ重シ錦官城 是指ス——ヲ欵

『韻府』に「海棠 子美無詩母名——也(詩話)」とある。『事文』には「不賦詩 杜子美母名海棠 故集中無海棠詩詩話」とあつて、『下学集』の前半部に該当する。後半部の類句に「子美詩才猶閣筆 至今寂寞錦城中」がある。

149 甘棠 毛詩ニ蔽芾タル——勿レ剪ルコト 勿レ伐コト 召公ノ所ナリ憩 左傳ニ愛ム其ノ——ヲ 況ヤ其ノ子ヲヤ乎

『韻府』に「棠（左）愛其甘——况其子乎 平棠〔詩篇〕（甘——）美召伯也」とある。『下学集』の注文の後半部に一致する。『太平御覽』は「毛詩曰 甘棠 美召伯也 蔽芾甘棠 勿剪 勿伐 召伯所友思其人 愛其樹」と、これも『下学集』と『韻府』とは略一致する。『事類賦』にも「美甘棠之聽訟 詩曰甘棠美召伯也 蔽芾甘棠 勿剪勿伐 召伯所友」と同注。

156 江南所無 梅ノ一名也 但シ日本ノ俗所レ呼フ欵 予謂ラク 南宋ノ范曄カ詩ニ曰ク 折梅ヲ逢フ驛使ニ乞ニ与隴頭ノ人ニ 江南ニ無シ所レ有ル 聊贈ニ一枝ノ春ヲ 盖シ取ニ此第三句ノ之意ヲ 而云フ江南無ト欵

『韻府』には「驛梅逢 折梅逢——寄與隴頭人 江南無所有 聊贈一枝春（范曄）」と見られる。『事文』には「陸凱 與范曄 相善自江南 寄梅花一枝 詣長安 與時贈詩曰 折梅逢驛使 寄與隴頭人 江南無所有 聊贈一枝春」とあつて、同一内容の記事が引用されてゐる。『合璧事類』も「江南寄 陸凱與范曄 ○善自江南 寄梅花一枝 詣長安 與曄 贈詩曰 折梅逢驛使 寄與隴頭人 江南無所有 聊贈一枝春」と略同注である。

157 楊 158 柳 159 檉 三字義同 檉ハ河柳也

『韻府』に「楊〔説文〕木名」、「柳〔説文〕小楊也」、「檉 河柳也（詩）其据其一（下略）」とある。『事文』には「旄澤柳 楊 蒲柳爾雅」、「楊 薄柳也 從木易声 檉 河柳也」とあり、『下学集』の注記はこの孰れとも一致する。『太平御覽』、『芸文類聚』も略同注。

174 茅 莊子ニ狙公賦茅ヲ 朝三暮四「元和版」は「衆狙皆怒ル 曰ク 然ラハ則チ朝四ニシテ 而暮三 衆狙皆悦フト云ク」を後に続ける。」

『韻府』には「茅 栗也 狙公賦」、「狙公賦栗 宋有——養 狙成群曰 與若茅 朝三暮四足乎 衆狙皆怒 曰 朝四暮三足乎 衆狙皆喜（列） 茅 栗也」とある。『事文』には「猴」の項に「賦狙公茅 宋有狙公 愛養狙 而家匱 將限其

食曰與若芋 朝三而暮四 衆狙皆怒 曰然則朝四而暮三 衆狙皆悅 列子とある。『太平御覽』も同注であるが「曰朝四而暮三 衆狙皆悅」の部分に欠く。「莊子曰」で始まる。『合璧事類』も『列子』を引き同注である。

178 銀杏 異名曰鴨脚ト葉ノ形チ如シ鴨ノ脚ト 山谷カ句ニ 風林収鴨脚ト

『韻府』に「銀杏 一名鴨脚 葉似也」とあり、「山谷カ句ニ……」は存せず。

V 花木・植樹類 (179 椏……226 柿) 「花木」 「植樹」等の分類はIVと必ずしも分明ならず。

181 木犀 桂

『韻府』に「犀 路植木犀——常依木而立(下略)」とあり、『事文』には「椏木桂樹 一名木犀」とある。

191 杜鵑花 即上ノ躑躅花ノ之夏也 杜鵑鳥 血ニ呼ク時節 此花盛リ開ク 色如レ染ル血ニ 故ニ云フ——ト 又云ニ映山紅ト

『韻府』には「鵑〔禽名〕杜鵑 又名雋周鳴 皆北向声 哀吻有血自懸於樹 自呼曰謝豹(下略)」、「鵑〔花名〕杜鵑 又名山石榴 山躑躅 映山紅」とある。『合璧事類』は「杜鵑花 一名山石榴 一名山躑躅 蜀人号曰 映山紅 所在深山中 多有之(下略)」と見られる。なほ『下学集』の「杜鵑鳥 血ニ呼ク時節」の部分に関する注として、『事文』に「一名山 鴛周 甌越間曰 怨鳥 夜啼達旦 血漬草木」とある。『太平御覽』の「羊躑躅」中に「杜鵑花」、「映山紅」は存せず。

193 梔子 無レ口 又云越桃ト

『韻府』に「越桃 梔子名 (本草)」 「梔 木名 一名薝蔔 又曰林蘭黄 不可染者」とある。『事文』の「衆花」に「梔子比衆木 人間誠未多」。

194 槿花 韻府ニ云ク 槿ニ有ニ黄白ノ者一 一ニ名ニ日及字書ニ云ク——ト 薜也 毛詩ニ有レ女同車ヲ 顔セ如ニ薜ノ華一 然ル 則シ薜ハ朝ニ榮ヘ夕ヘ衰フル花也 故ニ毛詩倭訓ニ呼レ薜ヲ曰ニ朝顔ト 亦タ不レ妨ケ也 由レ是ニ 日本ノ俗以為ヘ槿薜共ニ牽

牛花^ト 盖^シ以^テ倭^訓 共^ニ同^キ也 是^レ大^ニ誤^レ矣 宋人ノ詩ニ曰ク——籬ノ下ニ 点^{シム}秋ノ事^ヲ 早^ク有^ニ牽牛ノ上^リ竹^ニ来^ル
以^テ此^ノ詩^ノ意^ニ 則^チ槿^薺与^ト牽牛^ト 各別也 牽牛花 本名^ハ藤生花 状如^ニ扁豆^ト 始^メ因^テ田野人ノ牽^レ牛^ヲ 易^{スル}ニ^ニ藥^ヲ得^{タリ}
名^ヲ焉 古詩^ニ云ク 君子^ハ芳桂^ノ性 春濃^{ニシテ} 秋更^ニ繁^シ 小人^ハ槿花^ノ心^ヲ 朝^ニ在^テ夕^ニ不^レ存^セ

『韻府』に「槿 花有黄白者 一名日及 詩言舜華 (莊子) 貴支難而悲朱——(淮南吟咏) 君子芳桂性 春濃秋更煩 小人

——花心朝在夕不存」、「舜 木槿亦作舜 (詩) 顔如——華」、「牛「草木」(牽——花)作藤生花 状如扁豆 始因田野人

——易藥得名焉」、「舜華 顔如——(詩) 木槿也」とあつて、悉く『下学集』の語注に一致する。『下学集』注

文冒頭に「韻府」と明記する所以である。『太平御覧』は「毛詩 有女同車曰 有女同車顔 如舜華 舜 木槿也」とあ

り、「芸文」も略同注。『合璧事類』は『太平御覧』や『芸文』より詳しく「牽牛易藥 陶隱居云 作藤生花 状如

扁豆 黄色子 作小房實黑色 形如毬 療脚氣 此藥始出田野人——故以名之 本草

199 辛夷 木筆 又^ハ云^フ侯桃^ト 萸^ハ唐木^ニ作^レ夷^ト同

『韻府』に「萸「草木」(辛——)正二月華夏秋再開 如蓮花 而小紫苞紅艷 又名侯桃 木筆 新雉」と見られる。「木

筆」「侯桃」の二名を含めるのは『韻府』で、『下学集』の典拠となつたことが判る。『太平御覧』には「辛夷本

草經曰 辛夷 一名辛引 一名侯桃 一名房木」とあるが、「木筆」が存しない。『合璧事類』には「正二月開花 花既

落無子 夏秋再著花如蓮花 而小紫苞紅焰 人家園林多種之 一名侯桃 一名木筆 或以為子如相思子 離騷經 所謂辛

夷者即此」と見られて、『韻府』に次いで、『下学集』の注記に近似する。

202 櫻欄 唐李群玉詩——葉散^ノ夜叉^ノ頭^ヲ

『韻府』に「櫻(王璘)——欄葉散夜叉頭」、「合璧事類」には「夜叉頭 櫻欄葉散—— 李群玉 王櫻聯句」とある。

『事文』には「櫻花 劉貢父」、「櫻欄 梅聖俞」、「櫻欄 洪舜俞」の詩文例を挙げてゐる。詩聯用語であること

を示す。『太平御覽』の「栴檀」の項には李群玉の詩の引用存せず。

203 石南花 唐人ノ詩ニ云ク 不知青嶂夜來雨 晴曉——乱流云々

『韻府』には「石楠 ——亦木名 唐詩 清曉——花乱流 成都水寧觀 有四——皆千歲木 陰庇車百兩云 仙人遽君所植」と「唐詩」の用例を含めてゐる。『事文』は「成都犀浦國寧觀古楠記 陸務觀」として「有古楠四 皆千歲木也 枝椹雲漢（中略）而陰之所庇車且百兩（下略）」の他、「枯楠 杜甫」等の詩文の用例を挙げる。『太平御覽』に「唐詩」の引例存せず、「魏王花木志」「任昉述異記」の引用存せり。

205 椹椰子 食此ノ子一則消シテ食ヲ可レ慎ム 又食スレハ之ヲ 則醺然トシテ如レシ醉ヘルカ 東坡カ句ニ云ク 紅潮登レ頰ニ醉ニ椹榔ニ

『韻府』に「草木 鶴林云——食之醺然頰赤」、「紅潮登頰醉——（坡）」とあり、『下学集』の語注はこれに拠る。『太平御覽』や『芸文』にも記事があるが『韻府』より『下学集』には遠い。

206 楮 紙ノ材

『韻府』に「楮 一名穀（史） 蔡倫用——膚為紙（下略）」とある。

208 楸 梓類

『韻府』には「楸 栢葉松身以梓」と見受けられる。『太平御覽』に略同注あり。

210 杠 正月ニ所用 漢字ハ旗ノ飾

『韻府』は「杠 牀前横木 又旌旗竿（下略）」とある。

219 胡椒 此ノ木能ク生ニス多子一故ニ皇后ノ宮ニ慶シテ以テ植レ之ヲ 謂ニ之ヲ椒房椒室ト也 一説ニ云 皇后以レ椒ヲ塗レハ壁ニ温暖ニシテ辟ク悪氣一

『韻府』に「椒房 皇后宮以——塗壁 温煖辟悪氣（漢官儀）」と見られる。

224 氣條 見^二唐詩^一

『韻府』には「氣條 近世盡梅江西揚補也 有名然皆——耳（范石湖梅譜）」とある。「范石湖梅譜」の作者は宋の范成文（字致能、号石湖居士）。『事文』の「梅花」の項に「梅譜并序 范至能（後序）」があり、その末尾の部分に「近世始盡墨梅 江西有楊補之者 尤有名其徒倣之者 實繁 觀楊子畫 大略皆氣條耳」と見られる。

(二) 「數量門第十六」

『下学集』の「數量門」（第十六）は、次のI II IIIの語群より成つてゐる。グループ毎に解説する。
I 十三仏・二王等仏教語彙等（1十三仏……39十大弟子）

16 六根 眼根 耳根 鼻根 舌根 身根 意根

『事林広記』に「眼根 耳根 鼻根 舌根 身根 意根」とさながらに存する。類書で一種の名数語彙集たる『小学紺珠』には「四関」（心・口・耳・目）や「五慮」（耳・目・鼻・口・心）は存するが、「六根」は見受けられず。

1 十三仏并 十三逆修日次第（初七日 正月十六日 不動……十三年同廿八日 大日）

『拾芥抄』の「諸僧部第十二」の「十齋日」の「八日薬師如来・十四日普賢菩薩・十五日阿弥陀如来・十八日觀世音菩薩・廿二日得大勢菩薩・廿四日地藏菩薩」は『下学集』に部分的に一致する。『下学集』が直接『拾芥抄』に拠つたものでないことは言ふまでもない。また『拾芥抄』の「齋月年三長齋」とも「正月・五月・九月」が共通である。

17 六塵 色——声——香——味——觸——法——又云六境

『事林広記』に「色塵 声塵 香塵 味塵 觸塵 法塵」とあり、『下学集』に一致する。

18 六識 眼——耳——鼻——舌——身——意——（16六根に同じ）

『事林広記』に「眼識 耳識 鼻識 舌識 身識 意識」とあり、『下学集』に一致する。

19 三界ノ内ノ諸天 三界ト者 欲界 色界 無色界 (下略)

『拾芥抄』には「諸仏部^{第十}」に「三界」(一欲界・二色界・三無色界)とのみ存し、『下学集』の委しい語注は存せず。

20 四州 須弥山ノ四方也 (下略)

『拾芥抄』に「四州」を掲げるが、「一東州 二南州 三西州 四北州」とあり、それぞれに注記が存する。ただし『下学集』とは一致せず。

25 三寶 佛寶 法寶 僧寶

『拾芥抄』の「三寶以下部^{第十五}」に「三寶 一佛寶 二法寶 三僧寶」がある。

28 四弘誓願 衆生無邊誓願度 煩惱無邊誓願断 法門無量誓願学 佛道無上誓願成

『拾芥抄』の「四誓」に「一衆生無邊誓願度 二煩惱無邊誓願断 三法門無盡誓願知 四无上菩提誓願證」とあるのに『下学集』は一致する。

32 六通 天眼通 天耳通 他心通 宿仕通 神境通 漏盡通

『事林広記』の「六通」は「天眼通 天耳通 他心通 宿命通 神境通 如意通」であり、第六が異なる。

35 十悪 殺生 偷盜 邪婬 妄語 綺語 悪口 両舌 貪 嗔 邪見 36 十善 不^レ作^{二十悪}即^一也 別^ニ無^一

一義^一也

『拾芥抄』の「十善」は「一不殺生 二不偷盜 三不邪婬 四不妄語 五不悪口 六不両舌 七不綺語 八不慳貪 九不瞋恚 十不邪見」とあり、『下学集』の「35 十悪」「36 十善」はこれに該当する。また『拾芥抄』は「十善」の後に「梵網經戒品十戒」を続ける。これも類似する注記となつてゐる。

II 三皇・五帝・十哲等、皇帝・聖人・星座・経書・寺名等 (40三皇……72一両)

40 三皇 伏羲 神農 黄帝

『韻府』に「三皇——者 天皇 地皇 人皇 是也 其説不一無以取証当 以伏羲為天皇 神農為人皇 黄帝為地皇」とある。宋の『小学紺珠』の「歴代類」には「太昊伏羲氏 炎帝神農氏 黄帝有熊氏」と見られる。『拾芥抄』に「三皇 伏羲 神農 黄帝」とある。『下学集』はこれに拠るか。

41 五帝 少昊 顓頊 高辛 唐堯 虞舜

『小学紺珠』に「五帝」として「少昊金天氏 顓頊高陽氏 帝嚳高辛氏 帝堯陶唐氏 帝舜虞氏」とあるのが『下学集』に近い。『紺珠』は続けて「黄帝 顓頊 帝嚳 帝堯 帝舜」も掲げる。『拾芥抄』の「聖賢部 第二十二」に「五帝 少昊 顓頊 高辛 唐堯 虞舜」とあり、これは『下学集』の注記の形態に最も近い。「40三皇」「41五帝」は『拾芥抄』に依拠する。

42 十哲 孔子ノ弟子二千人中ニ粹スル者七十士々々々ノ中 粹ナル者曰フ十哲ト々々々ノ名ニ曰ク 德行ニハ 顔淵 閔子騫 冉伯牛 仲弓 言語ニハ 宰我 子貢 政事ニハ 冉有 季路 文学ニハ 子游 子夏也——ノ中粹ナル者 唯顔淵一人而已 於虚不幸短命ニシテ二十八歳ニシテ而死矣 顔淵一ノ名ハ顔回 孔子ノ曰ク回也 如レシ愚ナルカ 拾塵疑為メニハ 孔煮ル羹ヲ 有レ塵拾之 孔為ス疑ニ云々

『小学紺珠』に「四科十哲」として「[德行] 顔淵^回 閔子騫^損 冉伯牛^耕 仲弓^{冉雍} [言語] 宰我^子 子貢^{端木賜} [政事] 冉有^求 季路^{仲田} [文学] 子游^{言偃} 子夏^商」と列举する。これに続けて「孔子弟子七十二人」の名前を掲げる。

43 四皓 東園公 綺里季 夏黄公 冉里先生 此四人ハ避漢隱ニル商嶺逝仙也 漢イ本秦アリ

『韻府』に「漢書音義曰 東綺夏冉四姓也 陳留志 東園公 姓唐字宣明居園中 夏黃公 姓山佳名 名廣字少通齊人 隱居夏里 冉里先生 河内人 泰伯之後 姓周名術字元道」、「商山——從太子鬚眉 皓白衣冠甚偉（張良傳）」とある。『拾芥抄』の「聖賢部第二十二」に「商山四皓 園公 綺里季 夏黃公 冉里先生」と『下学集』の注記に近い。

44七賢 嵇康 阮籍 元咸 向秀 刘伶 王戎 山濤 以上七人へ避^レケテ晋^ラ 栖^ム竹林^ニ之隱逸也

『韻府』は「七賢 竹林——嵇康 阮籍 山濤 向秀 劉伶 阮咸 王戎」とある。『小学紺珠』にも「竹林七賢 阮籍 嵇康 山濤 劉伶 阮咸 向秀 王戎」とあるが、語順の違いがある。『拾芥抄』には「竹林七賢 嵇康 阮咸 阮咸 山濤 劉伶 王戎 山簡」とする。孰れも七賢の人名の排列に相異が認められる。

45三笑 晋^ノ遠法師 居^{シテ}庐山^ニ 誓^テ不^レ過^キ虎溪^ヲ 適^マ送^テ陶淵明 陸修静^ヲ 不^レ覺^ヘ影過^ク溪橋^ヲ 三人拍^テ手^ヲ 而大^ニ笑^ウ 矣 後人寫^{シテ} 以^テ為^ニ三笑^ノ之^一因^ト

『韻府』に「三笑因 遠法師居廬 阜不過虎溪 過輒鳴号 送陶淵明陸修静 与語道合不覺過之 因大笑世伝詳溪」、「虎溪 惠遠法師 送客過虎溪輒鳴号 陶元亮陸修静 与道合不覺送過虎溪 因大笑世伝三笑因廬山記」とある。『下学集』はこれに依拠する。『事文』に「三笑因贊 蘇子瞻」として「彼三士者 得意忘言 廬胡一笑其樂也 天嗟比小童麋鹿狙猿（下略）」、「書三笑因後 蘇子瞻」として「近於士人処 見石格畫此因 三人者皆大笑（下略）」等が存在するが、『下学集』の直接の典拠になつてゐるとは考へ難い。

50二十八宿 角 亢 氏 房 心 尾 箕 斗 牛 女 虎 危 室 壁 奎 婁 胃 昴 畢 觜 參 井 鬼 柳 星 張 軫 此内牛之星^ハ 毎日亭午^ニ出^{ツト}云^ク 牛ノ宿^ハ以^テ不^レ詳^ラ 不^レ列^レ位^ニ

『事林広記』には「二十八宿因」を掲げ解説をなす。『小学紺珠』にも「二十八宿史記曰二十八舍」として「角亢 氏 房 心 尾 箕 斗 牛 女 虚 危 室 壁 九十八度四分度之一 斗 牛 女 虚 危 室 壁 九十八度四分度之一 北方玄武 奎婁 胃 昴 畢 觜

参 八十度 西方白虎 井鬼 柳 星 張 翼 軫 百十二度 南方朱雀 周礼二十有八星之位 左伝天以七紀注二十八宿面七」とある。『事物紀原』に「宿度 漢書音義云謂分部二十八宿為距度」とある。

51 八卦 (語注略)

『拾芥抄』の「八卦部 第卅四」に詳細なる記載あり。『小学紺珠』の「八卦」に「乾 天健一南 坤 地順八北 震 雷動四 巽 風入五 坎 水陷六 離 火震三 艮 山止七 兌 澤説二」とあり。『事林広記』にも「八卦推六十四卦図」が存する。

52 八埏 53 八紘 二ツ共ニ八方ノ義

『韻府』に「八紘 九州之外有八賁 八賁之外有——東方之紘曰桑野 南方之紘曰反戸 西方之紘曰沃野 北方之紘曰委羽 (淮南子)」とある。

54 五穀 一ニ粟 黍ノ類 二ニ稻糯ノ類 三ニ豆ノ類 四ニ麻 五ニ麦 是如

『韻府』に「五穀 麻 黍 稷 麥 豆」とある。『小学紺珠』の「五穀 五種」には「麻 金 黍 火 稷 土 麥 木 水 (周礼)」、「春麥 夏菽 季夏稷 秋麻 冬黍 (月令)」、「稻 稷 麥 豆 麻 (楚辭)」、「黍 稷 菽 稻 (史記)」等の記事があるが、『下学集』に一致せず。『拾芥抄』の「飲食部 第廿八」に「五穀 稻穀 大麦 小麦 大豆 小豆、或 麥 黍 米 粟 大豆、或 止大豆 小豆 加蕭豆 胡麻、或 粳米 甘 麻 酸 大豆 鹹 小豆 若或麥 黄黍」と列記されてゐる。この四種の組合せの中では第二の「麥 黍 米 粟 大豆」近代用此等之申光平所令申院也 稜徒之時用之」が『下学集』にやや近いが、一致するものはない。

56 五經 周易 毛詩 尚書 周禮 礼記 已上五經 左傳 相加テ云フ六經ト

『小学紺珠』には「五經 易 書 禮 詩 春秋 (楊子法言)、詩 書 禮 樂 春秋 (漢芸文志)、周易 尚書 毛詩 左氏春秋 禮記 (唐五經博士)、書 詩 禮 易 春秋 (公羊)」等を挙げる。また「六經 詩 書 樂 易 禮

春秋、易書詩禮樂春秋」としても掲げてゐる。『事物紀原』にも「周易尚書毛詩春秋禮記」の順に解説する。『拾芥抄』の「経史部^{第廿三}」には「毛詩尚書礼記周易左傳^{已上謂之五経}」とする。

57 五常 仁 義 礼 知 信

『拾芥抄』の「五常部^{第十七}」に「五常 仁 義 礼 智 信」とあり、『下学集』と一致する注記である。『小学紺珠』には「仁^{木春} 義^{金秋} 礼^{火夏} 智^{水冬} 信^{土季夏}」とある。

58 五音 唇 舌 牙 齒 喉、宮^土 商^金 角^木 徵^火 羽^水

『拾芥抄』の「音楽部^{第卅一}」に「五音 宮^{一越} 商^平 角^雙 徵^{黄鐘} 羽^{盤涉}」とある。『小学紺珠』には「五姓 宮 商 角 徵 羽」とある。また「五声」としても存する。『事物紀原』には「諸調」として解説。

59 十二律 壹越 断金 平調 勝絶 龍吟^{下無} 双調 鳧鐘 黄鐘 鸞鏡 盤涉 神仙 鳳音^{上無以上十二}

『拾芥抄』に「十二律^{十一月} 壹越調^{十二月} 断金調^{正月} 平調^{二月} 勝絶調^{三月} 下无調^{号龍吟調} 四月 雙調^{五月} 鳧鐘^{六月} 黄鐘調^{七月} 鸞鏡調^{八月} 盤涉調^{九月} 神仙調^{十月} 上无調^{号鳳音調}」と見られる。『下学集』はこれに依拠したか。『事物紀原』は「律呂」中に説明あり。

したか。『事物紀原』は「律呂」中に説明あり。

60 六義 調 賦^ノ比 興 雅 頌 詩歌共^ニ言^レ之^ヲ

『小学紺珠』に「六詩 風 賦 比 興 雅 頌」とあり、『下学集』に一致する。

63 六親 父母 兄弟 妻子也

『小学紺珠』に「六親」として「父子 兄弟 夫婦、父母 兄弟 妻子」とある。『下学集』は後者に一致する。

64 九族 一子出家^{スレハ}者^一——生^ル天^ニ云^ク

『韻府』には「上自高祖下至玄孫(書) 又外祖父 外祖母 從母子 妻父 妻母 姑子 姉妹子 女子并 已同族(下略)」とある。これは『下学集』とは相異なる。『小学紺珠』の記事も『下学集』とは異なる。

65 一駄 馬ノ負物数

『韻府』に「駄 畜負物也」とあり、『下学集』はこれに拠るか。

66 一艘 船ノ数也

『韻府』は「艘 船總名」とある。

68 一梃 蠟燭 或鎗数也 日本ノ俗 鎗ヲ作鍵

『韻府』に「梃 杖也(孟) 可使制一」とあり、『下学集』とは相異なる。

71 一疋 馬或ハ絹ノ数也 凡ソ四丈ノ之絹ヲ曰ニ一疋ト也 風俗通曰ク 馬ノ夜行クニ 月照ニ前四丈ヲ 故ニ呼レテ馬亦ヲ謂ニ之一疋ト

本字ハ匹字也

『韻府』に「匹 俗作疋四丈也 馬光景一疋長 故亦曰疋 王丹賻友人縑一疋」とある。

IV 数量・助数詞・単位 (73 廿……86 筭) II の末尾 「一駄一両」の 8 語も助数詞である。

73 廿 二十也 音ハ入 74 卅 三十九(也) 音ハ颯

『韻府』に「廿 二十字并為一也」とある。「74 卅」は『韻府』に「卅 三十并也」とある。

75 兆 一字ト乖同字 十億也

『韻府』に「兆 又十萬為億 十億為一」とある。

76 仞 七尺ヲ曰レト 77 尋 八尺ヲ曰レト

『韻府』に「仞 八尺 通作輓(孟) 掘井九輓、「尋 八尺曰一」と見られる。

78 銖 十二分也 79 斤 十六兩也

『韻府』に「銖 十黍為綮 十綮為一 八銖為鎰」、「斤 斫木斧 又十六兩為一」とある。

80 鎰 二十四兩也 81 鈞 三十斤也

『韻府』に「鎰 金二十四兩為一 又云二十兩 又云三十兩」、「鈞 三十斤為一(董策)」とある。

82 一升 音蒸 日本ノ俗 作升ノ字之音一 十合ナリ 盖シ 因ニ 字ノ形シテ 相似ル 乎 大ニ 誤也

『韻府』には「升 布以八十縷為一 酒一 曰爵 二 一 觚 三 一 觶 四 一 角 五 一 散」。

83 斛 或作石也 其義云ク 米至レハ 斛ニ 則其ノ斗量重シテ 難シ 扛ケ 以レテ 石ヲ 懸テ 秤ニ 合ヘ 其ノ斛量ニ 則止ム 矣 後漢書ニ 鄭

玄身ノ長八尺 飲コト 酒ヲ 一斛 注ニ 曰ク 鄭玄カ腹中ニ 有レテ 石 大ニ 飲レム 酒ヲ 後年ニ 瀉レ 石ヲ 不レ 復レ 飲タ 石ノ字ヲ 為レ 斛 是也

『韻府』に「斛 「説文」十斗也」とあつて、「後漢書」の故事は見られず。

84 隻 一義也 85 件 分次 日本ニ 如レ 件ノ 云也 又一件ノ事

『韻府』に「隻 「説文」鳥一枚、「件 分也 又名一」とある。

86 筭 小木ニシテ 而四方上下 九々ニ 削レハ 之ヲ 者 表ニスル 九々八十一之極数ヲ 者也

『事物紀原』に「筭 後漢律曆志曰 隸首作数 晋律志曰 黄帝使隸首作筭数 博物記曰 隸首黄帝臣 一説 隸首善筭者也」とある。『拾芥抄』の「物苑 官位部第廿四 在九々」に「九々」の一覧あり。

なほIIに「九曜」は『龜田本』を始めとする古写本に見えぬが、増補系統本の『慶長十六年春良本』や『元和版』に存してゐる。これも『拾芥抄』の「属星部第卅五」に詳しく掲げられてをり、それを引用したものと思はれる。

三、『鹿苑日録』 収載聯句関連記事一覽

(一)周麟 (字景徐、慈照院、宜竹軒)

(1)長享一年(一四八七) 九月二九日条△殊上司等卜聯句▽往于慶雲踐派首座約喫飯、午後摠持院尼長老來賀(中略)、珠上司、霖侍者、胤侍者來、剪燭聯句十五句。

(2)長享一年(一四八七) 一二月一日条△聯句▽又往蔭涼、面謀寺產事、芳洲、茂叔先在坐、拭紙聯句、竺英桂詩曰、迎藤梅南頓、軒主使予(周麟)對之、押侵韻、予(周麟)曰、忍寒竹北音、主又唱曰、花莫如香雪、予(周麟)即曰、雲猶作早霖、予辭歸。

(3)明應八年(一四九九) 一月二五日条△百句ノ批点▽今日閑甫開詩場、以詩有神助為題(中略)、子龍嘉首座、端叔巖侍者袖百句來、求批点、万松主人邀頭矣。

(4)明應八年(一四九九) 三月一九日条△德大寺ノ請ニヨリ聯句ニ加点ス▽梅雲西堂來、謀問禪事、德大寺殿使來、求聯句之点、梅叔來(下略)。

(5)明應八年(一四九九) 三月二六日条 德大寺殿求聯句点、等待寺來、言小參問禪事(下略)。

(6)明應八年(一四九九) 四月二六日条△万松軒ノ聯句会▽昨暮過万松、則有聯句之会、予(周麟)臨座、有蘭葉衝冠髮之句、梅雲、万松、聯輝督予句、探韵則皆已押矣、及七十句也、予(周麟)對曰、荷団濟世緡、亦一句曰、

□前君小魯、即辭而歸矣、又過雲頂、松齋藏王挽袂而留、癸句曰、綠殘花迎客、予(周麟)次曰、熱輸雪近公、十句而終矣。

(7)明應八年(一四九九) 四月二六日条△聯句ノ記▽松齋請曰、記其月日、予引筆書曰、松泉主人松齋尊前、自菅廟

而歸、予偶訪之、留而聯句。松乎柏乎、梅花櫻花、豈得同其奇哉（下略）。

(8) 明應八年（一四九九）五月九日条。万松軒主ノ聯句ニ加点ス。万松軒主寄聯句百句、以求圈点、々者七十四句、命聽叫送之（下略）。

(二) 景三（字横川、小補軒、崇寿院） 〓聯句〓

(1) 長享一年（一四八七）一月一日条 赴小補、蔭涼在座、聯句五韻、聞来廿一日東山相公預修陞座。

(2) 長享二年（一四八八）二月一日条 往禅昌、会于聽松翁之齋、月翁、蘭坡、天隱、横川、桃源、正宗、了庵、春陽、龜泉、慕真皆在座（中略）、次聯句、朝喝食把筆唱句曰、

賞春花幾度、 聽松酬曰、 亭午柳多陰、 軒引睡兼客引睡、 院伝禅又心月、 筆誠元祐脚龜、

文是永嘉音蘭、 大雅松堪聽陽、 長生藥可尋王、 耆英馬席正、 莖草給孤林了、 山換經余眼慕、

風披醉後襟横、 昨拈梅一瓣桃、 夜釣月千金某、 鶯秦太平曲中書、 燕賈五字吟南陽、

句了拳盃、 一時勝会也

(三) 集証（字龜泉、雲頂院） 〓聯句〓…↓(一)↓(2)

(1) 長享一年（一四八七）一月一日条 肩輿往蔭涼、龜泉出迎、少時困爐笑話（下略）。二三日条 諸公促聯句五十韻、晡後景蒲来（下略）。二八日条 東福受珍侍發起、梅叔侍者留而一宿、困爐聯句。

(四) 桂首座（字竺英） 〓聯句〓…↓(一)↓(2)

(五) 桂悟（字了庵、大慈庵） 〓聯句〓…↓(一)↓(2)

(六) 景杲（字春陽） 〓聯句〓…↓(一)↓(2)

(七) 景茵（字蘭坡、雪樵、南禅寺、上生院仙館院） 〓聯句〓…↓(一)↓(2)

(八)瑞仙(字桃源) 〓聯句〓…↓(二)↓(2)

(九)瑞朝(字東啓、禪昌院) 〓聯句〓…↓(二)↓(2)

(一〇)禪昌院 〓聯句〓…↓(二)↓(2)

(一一)智鳳(南陽) 〓聯句〓…↓(二)↓(2)

(一二)政国(細川右馬頭、禪昌院大幢勝公禪門引睡) 〓聯句〓…↓(二)↓(2)

(一三)龍統(字正宗、靈泉院) 〓聯句〓…↓(二)↓(2)

(一四)周鏡(字月翁、栖芳軒等持院) 〓聯句〓…↓(二)↓(2)

(一)明応八年(一四九九) 一月一八日条 〓周麟二〓百句ノ批点ヲ求ム 〓東雲、端叔袖〓聯句百句 絶句詩十三首来、求批点。

(二)月英(喝食普広院)

(1)明応八年(一四九九) 二月二五日条 〓聯句〓約来廿八日看花事、月英求聯句。是正(下略)。

(2)明応八年(一四九九) 六月六日条 〓周麟二〓聯句ノ点ヲ求ム 〓点于月英所求之聯句、又点于鳳叔輝首座所惠之原龍與暉之百句。

(三)徳大寺殿

(1)明応八年(一四九九) 三月一九日条 〓周麟二〓聯句ノ点ヲ求ム 〓徳大寺殿使来、求聯句之点、梅叔来。

(2)明応八年(一四九九) 三月二六日条 〓周麟二〓聯句ノ点ヲ求ム 〓徳大寺殿求聯句点、等持寺来。

(四)万松院(相国寺)

(1)明応八年(一四九九) 四月二六日条 〓聯句会〓昨暮過万松、則有聯句之会、予臨座、有蘭葉衝冠髮之句、梅雪、万松、聯輝督予句。探韵則皆已押矣、及七十句也、予(周麟)对曰、荷团济世緡、亦一曰、□前君小魯、即辞帰

矣、又過雲頂、松齋藏主挽袂而留、癸句曰、綠殘花迎客、予次曰、熱輸雪近公、十句而終矣、松齋請曰、記其月日、予引筆者曰、松泉主人松齋尊前、^(丈)自菅廟而歸、予偶訪之、留而聯句、松乎柏乎、梅花櫻花、豈得同其奇哉。

(2) 明應八年(一四九九)五月九日条△周麟二聯句ノ圈点ヲ求ム▽万松軒主寄聯句百句、以求圈点、々者七十四句、命聽叫送之(下略)。

(3) 明應八年(一四九九)八月九日条△聯句▽万松求聯句之点、友竹来矣。

(4) 明應九年(一五〇〇)四月二九日条△聯句▽以折簡召余曰、有和漢、到則万松并宗藏主在座、一向聯句、万松唱曰、既雨梅調鼎、余和曰、乍晴笋出籬、五十句而成章(下略)。

(㉞) 真龍(字松齋、松泉軒)△聯句▽…↓(㉞)1

(㉟) 明屋

(1) 明應八年(一四九九)七月四日条△聯句▽明屋使人與端叔侍者来、袖出百句求点、蓋癸句則明屋夢中所得之句也、蝶飛花舞落、令予統之、不獲已、以螢聚月斜明(下略)。

(㊱) 輝首座(字鳳叔)

(1) 明應八年(一四九九)六月六日条△聯句▽点于月英所求之聯句、又点于鳳叔輝首座所惠之原龍與暉之百句。

(㊲) 原龍△聯句▽…↓(㊲)1

(㊳) 祖原(字蓮甫)

(1) 明應八年(一四九九)六月一〇日条△聯句会▽原藏主(祖原)今日招同舍諸郎而聯句。

(㊴) 等衛(字叔鳳、万松軒)

(1) 明應八年(一四九九)七月一九日条△聯句▽端叔侍者袖聯句而求点、叔鳳侍者同求点矣。

④堆雲和尚

(1) 明応八年（一四九九）八月四日条△聯句▽又訪堆雲和尚、因見待予來、東帰和尚在座、又法旛院聖諗喝食相從居座上、聯句。執筆者十六句、其筆法不乱行（下略）。

⑤周覚（字天庵、大徳院宝所軒）

(1) 明応八年（一四九九）九月七日条△聯句▽赴慈照院祖忌之齋、詣淡路之宅、成春通報焉、天庵留而侑杯、予唱曰、秋雨停杯話、和曰、烟蘆推枕眠、歸院。

⑥惠吳侍者（字梅坡、来薰軒ノ徒）

(1) 明応八年（一四九九）一〇月一日条△聯句執筆▽訪寿春之閑居、梅坡侍者在座執筆、聯句六句而止矣。

⑦妙永（字寿春、南涯）△聯句▽…↓⑥①（前項）

⑧為広（冷泉左衛門督）

(1) 明応八年（一四九九）一〇月一三日条△義澄卜聯句ヲ賦ス▽予詣公府、蓋謝内書也、相公出迎、举盞見侑、因和漢聯句、冷泉殿発句、予和之、第三句則相公也、及黒昏以帰院（下略）。

⑨法霖（字梅叔、大梅軒）

(1) 明応九年（一五〇〇）三月三〇日条 付與侍真霖蔵主、往勢州之宅、以謀退事、備州并聯歌。摠尼在庵見留。

⑩梅雲

(1) 文亀三年（一五〇二）九月二一日条△聯句▽梅雲見送一樽一肴、秉燭聯句（下略）。

⑪蔭涼軒△詩聯句会▽…↓⑥①

⑫寿信（字春湖、梅熟軒）

(1) 天文一〇年（一五三九）三月一四日条△詩聯句会ヲ開ク▽於蔭涼詩聯句之会、玉子寿子侍席末矣。

③法玉（字智岳）△蔭涼軒ノ聯句会▽…↓③①(1)

④昌寿△蔭涼軒ノ聯句会▽…↓③①(1)

⑤集堯（字仁如、雲澤軒）

(1) 永祿九年（一五六六）五月二五日条△聯句▽帰時示古人聯句之一冊、事々慈恩不所毫端及也。

(2) 永祿九年（一五六六）五月二六日条△聯句▽明日者聯句、題贊北窓淵明（下略）。

(3) 永祿九年（一五六六）五月二七日条△聯句▽聯句人数十余員、句中子句二、書寄江辺鳥、芳胤对、凶丕日

本蜻、以日本名蜻蜓州云々（中略）、聯句到夜半鐘終。

(4) 永祿九年（一五六六）五月二九日条△聯句▽自伏陽老師之一封来、乞比丘尼之名之切、即書而応其命矣、仁和寺

殿三、聚韻之下題、使睡足書、書法分韻三即一云々、印書記雖来、他適欠對話。

(3) 永祿九年（一五六六）五月二〇日条 為仁如之使到光源（中略）、借子中興之詩去、仁如見放翁集次、紅葉勝春花

之句、好詩之題也云々、（中略）僚丸之字 詳于韻府丸字、有唐七帝之師之語亦在之。

(4) 永祿九年（一五六六）六月一日条△月次詩会▽午刻大仙院主松嶺禾上来駕、睡足对面（中略）、今月々次会之章

句、消暑詩勝葛胸襟六月霜、睡足欲出詩題、□吟詩消暑與章句如合符、又重題、蟬不知雪、塩鉄論語曰、以不觀

不信人、如蟬不知雪、春輝問睡足曰（中略）、未刻老漢上洛、睡足曰、天竺者姓孤竹之君也、詳韻会之竺字。

(5) 永祿九年（一五六六）六月六日条 作蟬不知雪之詩、其詞曰、綠槐深処一蟬来、飲露枝頭薄命哉、苦得長生可知

雪、学仙可近栢梁台云々。

(6) 永祿九年（一五六六）六月八日条 午刻觀藏主、芳侍者来臨、觀公賦漫与之一句、竹雨甘凉味、子对曰、葛風推

暑威云々、六句而終矣。

(7) 永祿九年（一五六六）六月九日条 聯句、人数十余員、句之韻陽唐、放參之鐘以前終矣。

(8) 永祿九年（一五六六）六月一七日条△東福寺ノ聯句ニ加点ス▽自東福聯句来、請睡足之点、句中以麻姑書麻胡、睡足不審云々。

(9) 永祿九年（一五六六）八月一七日条△月次聯句会ノ詩題ヲ出ス▽寿首座為同道、予月待、睡足出当月之詩題、閏年梧桐云々。

(10) 永祿九年（一五六六）八月二五日条 聯句、蘭秀・鶴嶺・唯之三傑不来、支ノ句、句洩、至夜半鐘、頭人慈英觀藏主、詞題閏年梧桐、老師上洛。

（三）等汀（字芳胤）

(1) 永祿九年（一五六六）五月二一日条△月次詩会ヲ催ス▽芳胤之破題曰、夢道安居雨、於梅有送迎。

(2) 永祿九年（一五六六）八月一日条△聯句会▽自芳胤今月聯会章句之対来、頭人慈英、上句曰、豐鐘猶未動、楓寺欲霜時、芳胤之対曰、趙壁尤可惜、芸窓過隙曦、詩題者未出。

（四）相国寺△聯句▽↓（三）（3）・（四）（4）・（5）・（6）・（7）・（8）

(1) 永祿九年（一五六六）五月二五日条 自宝巖門主（伏見）賜排句（中略）帰時示古人聯句之一冊。

(3) 永祿九年（一五六六）五月二六日条 齋後自伏見上洛、明日者聯句、題贊北窓淵明。

(4) 永祿九年（一五六六）五月二七日条 聯句人数十余員、句中予（法霖）句二、書寄江辺鳥、芳胤対、凶不日本蜻、以日本名蜻蜓州云々（中略）、詳才子伝排句韓字等、聯句到夜半鐘終。

(5) 永祿九年（一五六六）六月一二日条 暮景印書記来、自慈照及晚鴉先日之聯句并詩之清書来矣。

(6) 永祿九年（一五六六）六月一四日条 庵主者玉甫宋藏主也、予（法霖）章句曰、傾蓋尋知己、夏山催雨來、玉甫對曰、拳盃忘旧惡、矮屋酌霞回、句者此一對而已。

(7) 永祿九年（一五六六）九月一日条 齋前印書記來、借睡翁之聚分韻、予借用之分而應命、觀藏主來儀、話世人之章句、其句曰、喜聽落梧雨、作塵殘暑花、對曰、緬思少林寺、面壁九年麻（磨）妙心寺之袁書記來、近日於妙心有句、請策彦之点云々、予問破題句、袁公曰、葉落窓疑雨、對曰、楓紅景勝春、策翁上句、無点（中略）、澄月至東福、今日逗留（下略）。

(8) 永祿九年（一五六六）九月二日条 策翁已欲歸之時、元理老人來、重而出杯、睡翁之上句云、和尚自西嶺、相逢只說禪、策翁對曰、德輝如北斗、后學幾詩書、躔此次月溪句曰、座仰二尊宿、予對之曰、叢遺三老年、六句而終矣（中略）、乞去月聯句之清書。

(丙) 泉君（普広院）

(1) 永祿九年（一五六六）七月六日条 聯句集 自泉君聯句集一冊借用、即應基命矣。

(己) 聖澄（字月溪、勝林庵松月軒）… ↓ (己) (7)

(1) 永祿九年（一五六六）九月二日条 聯句 躔此次月溪句曰、座仰二尊宿、予對之曰、叢遺三老年、六句而終矣（中略）、乞去月聯句之清書。

(2) 永祿九年（一五六六）一〇月一日条 暮鴉与月溪問 黃詩之審於睡翁。

(四) 周良（字策彦、妙智院）

(1) 永祿九年（一五六六）九月一日条 妙心寺之袁書記來、近日於妙心有句、請策彦之点云々、予破題句、袁公曰、葉落窓疑雨、對曰、楓紅景勝春、策翁上句、無点（下略）。

(2) 永祿九年（一五六六）九月二日条。周堯卜聯句。策彦和尚來臨、睡翁勸盃、策翁曰（中略）、策翁已欲歸之時、元理老人來、重而出杯、睡翁之上。句云、和尚自西嶺、相逢只說禪、策翁對曰、德輝如北斗、后學幾詩書、躔此次月溪句曰、座仰二尊宿、予對之曰、叢遺三老年、六句而終矣。

(3) 永祿九年（一五六六）九月三日条。妙智來駕、漫興六句事、見于昨日之部、策翁曰（中略）、上句曰、愧我慕桑下、為梅又扣門、三益對之曰、感君坐蒲上、有菊不窺園、雪嶺禾上曰（中略）、策翁到妙心寺、歸庵賦寓興之一句。曰、話及拈華曉、客西方美人、（中略）策翁對曰、吟須照梅月。

(4) 永祿九年（一五六六）一〇月二三日条。宗香卜聯句。晚間策彦和尚來臨（中略）、策翁句云、登龍桃第二、春早有梅門、梅屋（宗香）對之、在雜花奇絕、雪早吐藥園、六句而終矣。

〔四〕禪論（字龜年、妙心寺）…↓〔四〕(3)

(1) 永祿九年（一五六六）九月三日条。策翁到妙心寺、歸庵賦寓興之一句曰、話及拈華曉、客西方美人、策翁讓對於龜年、々々日、已上句。有客之字、則不干吾事云々、策翁對曰、吟須照梅月、主北野天神、龜翁歎（嗟）不止。

〔四〕三益（永瑾ノ小師）▲聯句▽…↓〔四〕(3)

〔四〕宗香（字梅屋、真乘院）▲周良（策彦）卜聯句ス▽

(1) 永祿九年（一五六六）一〇月一三日条。晚間策彦和尚來臨、睡翁對談移刻、策翁之話云、曾赴南禪、與梅屋打話、策翁句云、登龍桃第二、春早有梅、梅屋對之、在雜花奇絕、雪早吐藥園、六句而終矣。

〔四〕觀藏主（字慈英、觀首座）▲聯句會頭人▽

(1) 永祿九年（一五六六）八月二五日程。聯句、蘭秀・鶴嶺・曜之三傑不來、支ノ句、句洪、至夜半鐘、頭人慈英觀藏主、詞題閏年梧桐、老師上洛。

(2) 天正一七年（一五八九）三月二五日条 於牧庵有聯句、有節・有和・主翁・觀首座・予五人也。

〔圖〕牧庵（号昨波）△聯句会ヲ催ス▽↓〔圖〕(2)（牧庵第聯句）

(1) 天正一九年（一五九二）四月二五日条 牧庵来也、聯句一巡管見、句曰、岑碧鷓啼黑、留君不少時、英甫対曰、

昏黃鴉□黑□ケ残涯（中略）、自幽齋有使、廿八日和漢云々、東山古澗光訪（下略）。

(2) 天正一九年（一五九二）四月二六日条 齋了赴牧庵、聯句、午後了困碁。

〔圖〕寿筠（字有和、禪昌院）

(1) 天正一七年（一五八九）三月二五日条△牧庵邸聯句会▽於牧庵有聯句、有節・有和・主翁・觀首座・予五人也、

終筵尤早。

(2) 天正一九年（一五九二）四月一八日条 禁中千句之中可投宿云々…↓〔圖〕(3)

(3) 天正一九年（一五九二）九月八日条 齋了侍禁宸聯句、禪昌句云、先節滿城菊、花承朝露香、玄圃対曰、雖晴□

葉、梧落井欄忙、寿鑑来也。

(4) 文祿一年（一五九二）四月一六日条 早晨侍鳳闕（中略）、今日千句御会章句之定也、聯句百韵在之、於禁闕御千

句之次第、第一御製、題子規（中略）、第五題稚笋予、予雖為禪昌院後、俄自殿下賜紫衣帖如此、故一句一章相統也。

進砌錦衣笋予（瑞保）、傾陽金笠

葵聖門（下略）。

(5) 文祿一年（一五九二）四月一九日条 侍御前、主聖曰、予御製対御感、辱低頭而已、百句了、午時前嚟齋、次百

韵資始（中略）、禪昌彭西堂・兩翁同宿、禪昌・予寄宿為上被仰出也（下略）。

(6) 文祿一年（一五九二）四月二四日条 乘荷輿赴日野殿、禪昌彭西堂同途而赴禁中、伸禮謝而已、日野殿同輿侍殿

下、々々禁闕聯句如何、予謀之、主聖尊句殿下感荷不斜也。

(7) 文祿三年（一五九四）一月二五日条△五山月次聯句会▽五岳詩聯之会如恒、題鳳凰集京師、自建仁出之（中略）
禅昌・月溪以病辞之。

(8) 文祿三年（一五九四）自二月五日至三月二七日（裏文書）月次聯句出座衆、「南禅寺」語心院・悟西堂・冲西堂・洪西堂・伝首座、「天龍寺」禅昌院・彰西堂・寔西堂・彭西堂、「相国寺」鹿苑院・普広院・宥西堂・舜首座・松首座、「建仁寺」兩足院・稽西堂・精西堂、「東福寺」龍吟庵・海蔵院・澄西堂・珊西堂・藤西堂・濟西堂・賢西堂・玄首座・柔首座、以上、文祿二年正月五日民法。

〔四〕東京△東京月次聯句会▽

(1) 慶長二年（一五九七）一月二三日条 一昨日廿一日、東京月次之聯句也、左・璵逗留、赴会席。

(2) 慶長二年（一五九七）二月二日条 今日帰来、左・璵為明日内会赴東京。

(3) 慶長二年（一五九七）二月二日条 東京月次、瑞春総首座作頭役。一昨日欵。

〔四〕永哲（惟杏、正統庵）

(1) 永祿九年（一五六六）八月一〇日条 易講、夕終而呼松岩・景印・真首座・元理等、被催粥、自禅鐘到深更、聯句有甘句、睡足・惟杏與予（承兌）而已。

(2) 永祿三年（一五九四）五月二五日条△五山月次聯句会欠席▽聯句会辞退衆惟杏・月溪・惟舟也。

〔四〕承兌（字西笑）

(1) 永祿九年（一五六六）八月一〇日条△聯句▽自禅鐘到深更、聯句有甘句、睡足・惟杏與予（承兌）而已。

(2) 永祿九年（一五六六）九月一日条 近日於妙心有句、請策彦之点云々、予（承兌）問破題句、袁公曰、葉落窓疑雨、对曰、楓紅景勝春、策翁上句無点。

(3) 永祿九年（一五六六）九月二日条 躔此次月溪句曰、座仰二尊宿、予（承兌）对之曰、叢遺二老年、六句而終矣此事三日也
 （中略）、乞去月聯句之清書。

(4) 天正一七年（一五八九）三月二五日条△牧庵第聯句会▽於牧庵。有聯句、有節・有和・主翁・觀首座・予（承兌）五人也、終筵尤早。

(5) 慶長二年（一五九七）一〇月一八日条 終日不他出、見經卷之外無外事、入夜聯句五六句（下略）。

(6) 天正一九年（一五九七）四月二一日条 與養源同伴赴禁中、各々会同、養源・予（瑞保）遲參也（中略）、未刻三百句了各々退出（中略）、日未夕陽之際、今百句可仕云々、各々伺候（中略）、於日野殿與西咲同宿。

(7) 天正一九年（一五九七）九月八日条 齋了侍禁宸聯句、禪昌句云、先節滿城菊、花承朝露香（下略）。

(8) 天正一九年（一五九七）一月九日条 侍禁闕聯句席、西咲句曰、奇事無如雪、万山一色花、予（瑞保）对曰、清談宜汲瀑、雙井太玄茶、百聯了、及深更踏月退散矣。

(9) 文祿三年（一五九四）一月二五日条△五山月次聯句会▽五岳詩聯之会如恒、題鳳凰集京師、自建仁出之。

(10) 文祿三年（一五九四）一月二五日条 月次会如恒、辞退衆西咲・三章・梅真・月溪・維舟也。
 〔西〕瑞左

(1) 慶長二年（一五九七）四月一五日程△月次聯句▽左・璵為月次聯句到東京、齋了先赴東福（下略）。

(2) 慶長二年（一五九七）二月二一日条 昨晚沼首座被來、今日歸來、左・璵為明日内会赴東京。

(3) 慶長二年（一五九七）二月二二日条 東京月次、瑞春總首座作頭役、一昨日欵。

〔西〕瑞保（初周保、字有節、慈照院）

(1) 天正一七年（一五八九）三月二五日条△牧庵第和漢聯句▽於牧庵。有聯句、有節・有和・主翁・觀首座・予（承兌）

五人也、終筵尤早。

(2)天正一九年(一五八九)三月六日条△近衛信尹二章句ヲ呈ス▽即自聖門主嚴命之由也、予(瑞保)返章云、第三之句。尤諾、蝶者柳之次如何、柳_二蝶之付。合。於。漢。無。之。月。之。句。自。是。可。得。台。意。云。々、晚間綴章句、呈近衛殿下、句曰、遷喬鶯囀月云々(下略)。

(3)天正一九年(一五九七)四月二一日条 與養源同伴赴禁中、各々会同、養源・予(瑞保)遲參也(中略)、日未夕陽之際、今百句可仕云々、各々伺候、及深更了也。

(4)文祿一年(一五九三)四月一六日条 早晨侍鳳闕、先用粥、然後侍御前、今日千句御會章句之定也、聯句百韵在之、於禁闕御千句之次第、第一御製、題子規、雲湿筒松樹、中庭好聞鶯、陰深新柳葉、初夏属藏蟬_{予(瑞保)}、

第二聖門、同夏山、夏山春色又、晴曝雨声常_{景洪}、第三梅谷、同牡丹、磨露牡丹玉、送春始見花、

斟泉熊白盞、至午忽当茶_{周彭、天龍寺}、第四水無瀨、同流螢、袖拾流螢去、筆跳霜兔真_{御製}、第五題稚笋

_{予、子雖為禪昌院後、俄自殿下賜紫衣帖如此、故一句一章相統也、}進砌錦衣笋_予、傾陽金笠葵_{聖門}、第六同鳴蟬_{景洪}、蟬喧新綠裡、霖霽夕陽收、

鷄唱殘燈下、更闌曉漏迢_{元冲}、第七同梅雨_{廣橋中、納言}、應是昨來雨、黃樹落有声、堪濡籬畔露、綠草儘相生

{水無瀨、}第八同愛蓮{元冲}、禁池蓮賜浴、涼雨竹移園_{正悟}、第九同揮扇_{正悟}、一天宜避暑、揮扇_口薰風、長

夏如飛電、困甚響綺櫳_{曲臘}、第十同涼月_{周彭}、涼到入簾月、景佳開画巒_{周洪}、追加同清泉_{周洪}、泉滴添琴

色、雪清凝玉膚_{廣橋}、追加可有五十句云々、雖然百句被仰出、一番之对、楼高響鼓腰云々、雖然百句故对相改

也。

(5)文祿一年(一五九三)四月一九日条 乘荷輿侍鳳闕、水無瀨中納言、廣橋中納言伺候、其次予伺候(中略)、侍御前、主聖曰、予(瑞保)御製对御感、辱低頭而已、百句了、午時前喫齋、次百韵資始、日傾西嶺之頃句了(下略)。

(6) 文祿一年（一五九三）四月二四日条 乘荷輿赴日野殿、禪昌彭西堂同途而赴禁中、伸禮謝而已、日野殿同輿侍殿下、々々禁闕聯句如何、予（瑞保）謀之、主聖尊句。殿下感荷不斜也（下略）。

(7) 文祿一年（一五九三）五月一七日条 齋了侍鳳闕御聯句、雄長老章句曰、騰茂竹台雨、予（瑞保）對、避塵松蔭涼、百句了以後、千句懷紙歷覽。

(8) 文祿一年（一五九三）九月一二日条 喝食著紗衣入内（中略）、御製句曰、節過々陶后、疎籬菊徑荒、予（瑞保）對曰、道賢々孔子、古曲杏壇芳（中略）、卅句書之（中略）、侍御前衆梅谷・景洪・予也、百句了也。

(9) 天正一九年（一五九七）九月一〇日条 日野輝資卜聯句 松公同途而赴日野殿新殿（中略）、亞相句云、不意迎佳客、有樽菊泛杯、予（瑞保）對曰、每逢尊聖主、如錦葛多材、連十句而回去、々々次、松公被曳袂、喫晚食、及深更歸矣。

(10) 文祿三年（一五九五）自二月五日至三月二七日裏書（文祿二年正月五日条） 五山聯句会 月次聯句出座衆、「南禪寺」語心院、悟西堂、沖西堂、洪西堂、伝首座、「天龍寺」禪昌院、彰西堂、寔西堂、彭西堂、「相国寺」鹿苑院、普広院、宥西堂、舜首座、松首座、「建仁寺」兩足院、稽西堂、精西堂、「東福寺」龍吟庵、海藏院、澄西堂、珊西堂、藤西堂、濟西堂、賢西堂、玄首座、柔首座、以上 文祿二年正月五日 民法

(11) 文祿三年（一五九五）九月一六日条 後陽成天皇ノ勅命ニヨリ五山詩聯ヲ献ズ 自在松雙瓶・松茸來、自菊亭殿有使、五山月次詩聯有失却、可補之由勅命也云々。

(12) 文祿三年（一五九五）三月二七日条 歸雲院聯句会 早晨於歸雲有齋、於数奇屋調之、英岳・以心・文叔同伴也、午時於語心有非時湯漬也、華麗驚眼也、聽松・梅心・英岳・以心・文叔同伴、梅印句、為迎華客駕、春後再回春、予（瑞保）對、依煮草魁茗、塵中屢避塵、十六句而了也。

(酉)玄以(前田民部卿法印德善院)

(1)天正一九年(一五九一) 一二月九日条△大村由己第聯句会▽…↓(酉)(2)

(2)文祿三年(一五九五) 自八月二六日至九月一日裏書△五山聯句衆ノ書立▽一、短冊帑御廻之段、尤可然存候、五山へ從我等廻申事、右之取乱に付、一切不可成候間、小鷹にても何にても可參候。

(酉)光源院△聯句会▽

(1)慶長二年(一五九七) 九月二六日条 於光源院有八月々次之聯句、午時善哉餅。晚一汁二菜。

(2)文祿一年(一五九四) 一二月二〇日条 圭藏主尋訪、月次聯会廿三日可催云々、諾矣。

(3)文祿一年(一五九四) 一二月二三日条 赴圭藏主頭役月次聯会、蓋於光源在之、午時雲門、晚炊丁寧(中略)、聯句了宴遊、及八鼓散矣。

(4)慶長八年(一六〇三) 二月二日条 赴光源院、聯句相談、頃刻而帰院。

(5)慶長八年(一六〇三) 二月二八日条 先至光源院、早各々光駕、聯句卅句至、超藏主執筆、聯中瑞雲・昕英・覺翁・江叔・丘叔・明叟・玄室・以上九人(中略)、夕食聯句了テ点燭受用之。

(6)慶長九年(一六〇三) 六月一日条 先至光源院逢雅会、昕英・文嶺・丘叔・魯雲・玉質・晟侍者各々十一人(中略)、光源院ニ来テ逢雅会、絶言語、七十五句日之時、自里来、絶言(下略)。

(7)慶長一八年(一六一三) 六月三日条 午刻到光源院、晚炊以後、主席玄室西堂唱上句、予和之、聯句十六句(中略)、賡光源院之句、到四十八句而止。

(酉)道澄(聖護院、高照院)

(1)天正一九年(一五九一) 三月四日条△聯句▽即自聖門主巖命之由也、予返章云、第三月之句尤諾(中略)、柳蝶

之付。合於漢。無之。月之句。自是可得台意云々、晚間綴章句、呈近衛殿下、句曰、遷喬鶯囀月云々。

- (2) 天正一九年（一五九一）五月六日条 於常御所拜龍顏、聖門・陽明居緣、玄圃・西咲・有和・予居小緣、日野殿・水無瀨同前、和歌書持來、聖門・陽明各々点檢、主聖嚴命曰、予可致章句云々、雖然御句曰、
予可致對之由嚴旨、予對曰、新綠竹風声、主聖曰、尤可也云々、十六句在之。

- (3) 天正一九年（一五九一）五月六日条 侍鳳闕、於常御所拜龍顏、聖門・陽明居緣、玄圃・西咲・有和・予居小緣（中略）、聖門・陽明各々点檢、主聖嚴命曰、予可致章句云々、雖然御句曰、已黃梅雨色（下略）…↓(2)

- (4) 文祿一年（一五九四）四月一六日条 早晨侍鳳闕、先用粥、然後侍御前、今日千句御會章句之定也、聯句百韻在之、於禁闕御千句之次第、第一御製、題子規、雲濕箇松樹、中庭好聽賦、陰深新柳葉、初夏屬藏蟬予（中略）、第五題稚筍 予、予雖為禪昌院後、俄自殿下賜紫衣帖如此、故一句一章相統也、進砌錦衣筍予（瑞保）、傾陽金笠葵聖門（下略）…↓(5)↓(4)

- (5) 天正一九年（一五九一）一〇月九日条 赴陽明殿下、歸路之次、侍聖門章句、得台意則投于日野殿、句曰、葉雨推窓月。

〔雷〕季滿（藪中將）

- (1) 天正一九年（一五九一）五月一〇日条 禁中七言聯句ノ執筆 侍禁裡聯句、執筆藪中將殿、執筆如和漢句々相唱、硯文台在之、聯句了次第、七言聯句之義嚴命（中略）、上句曰、涼風細々竹香色、玄圃對曰、夕霧濛々植篆烟、予（瑞保）曰、上句香字對植、亦香如何（中略）、五十句而各々退散矣。

〔英〕靈三（字玄圃、聽松院）

- (1) 天正一九年（一五九一）八月二五日条 赴雲興齋、久昌・康同伴、陽明殿下・玄圃同途、侍禁闕聯句、々々半（下略）。
- (2) 天正一九年（一五九一）九月八日条 齋了侍禁宸聯句、禪昌句云、先節滿城菊、花承朝露香、玄圃對曰、雖晴

葉、梧落井欄忙、壽鑑來也。

(3)慶長八年(一六〇三)四月六日条、一昨四日、於禁中雅會、各々[]參勤出、於相国者有節、於南禪者玄甫・梅印両老、聯句無一巡、於即席取闌、出章句、破題之闌梅印被取之ト[]、章句及韻ト有直誼(勅)、此故梅印、紅葉亭塔新、知遭恩雨浴(下略)。

(4)文祿三年(一五九六)三月二五日△五山月次聯句會▽詩聯會如恒、題檐花細雨、破題句、綠新春已暮、何処覓殘紅、洪西堂、对玄圃、紫禁天将曙、博山帶御烘也。

(5)文祿三年(一五九六)三月二五日△五山月次聯句會▽聯會如恒、辞退衆梅心・悦叔・文叔・梅真・集雲王僧也、詩題鳥声惜春。

(丙)前久(近衛龍山准后、東求院)

(1)文祿一年(一五九四)七月二九日条 齋了侍禁堀和漢之會也、會衆薰衣香袋人々一ヶ充拝領、龍山・聖門二ヶ充也、南禪洪西堂疏代筆一縉持來。

(丙)後陽成天皇

(1)天正一九年(一五九一)三月二五日条△五山衆ニ題詩ヲ命ゼラル▽終日而帰院、自近衛殿下有使星、為勅命五岳諸老題詩之由、嚴旨既降云々、盆山之上松一本在之由也。

(2)天正一九年(一五九一)五月六日条△聯句御會ノ御製句▽依禁宸伺候(中略)、主聖嚴命曰、予(瑞保)可致章句云々、雖然御句曰、已黃梅雨色、予可致对之由嚴旨、予对曰、新綠竹風声、主聖曰、尤可也云々、十六句在之。

(3)文祿一年(一五九四)五月一七日条 齋了侍鳳闕御聯句、雄長老章句曰、騰茂竹台雨、予(瑞保)对、避蘆松蔭涼、百句了以後、千句懷紙歷覽、同字人々个々改正之。

(4) 文祿一年（一五九四）四月一六日条 今日千句御会章句之定也、聯句百韵在之、於禁闕御千句之次第、第一御製、題子規、霏湿箇松樹、中庭好聽鶻、陰深新柳葉、初夏屬藏蟬（下略）…↓(丙)↓(4)

(5) 文祿一年（一五九四）九月一三日条 聖帝曰、喝食始而御覽可愛云々、御製句曰、節過々陶后、疎籬菊徑荒、予（瑞保）対曰、道賢々孔子、古曲杏壇芳（中略）、百句了也。

(6) 文祿三年（一五九六）九月一六日条△瑞和二五山月次詩聯ノ失却セシモノヲ補ハシメラル▽自菊亭殿有使、五山月次詩聯有失却、可補之由勅命也云々。

(7) 慶長一七年（一六一二）一二月一一日条△聯句御会▽自院御所御聯句了来而投宿、調羅聞侑之。

(8) 天正一九年（一五九一）四月二五日条△牧庵第聯句会▽牧庵来也、聯句一巡管見、句曰、岑碧鶻啼黑、留君不少時、英甫対曰、昏黃鴉□黑□ケ残涯、於木下道昌能在之（中略）、自幽齋有使、廿八日和漢云々、東山古澗光訪（下略）。

(丙) 輝資（日野唯心院）

(8) 文祿一年（一五九四）九月一三日条 早晨赴日野甲第（中略）、御製句曰、節過々陶石、疎籬菊徑荒、予（瑞保）対曰、道賢々孔子、古曲杏壇芳（中略）、百句了也。

(14) 天正一九年（一五九一）九月一〇日条△瑞保卜聯句ス▽松公同途而赴日野殿（中略）、亜相句云、不意迎佳客、有樽菊泛杯、予（瑞保）対曰、每逢尊聖主、如錦葛多材、連十句而回去。

(丙) 禁中千句聯句御会

(1) 文祿一年（一五九四）四月一六日条 早晨侍鳳闕、先用粥、然後侍御前、今日千句御会章句之定也、聯句百韵在之、於禁闕御千句之次第、第一御製、題子規、霏湿箇松樹、中庭好聽鶻、陰深新柳葉、初夏屬藏

蟬予（瑞保）、第二聖門、同夏山、夏山春色又、晴曝雨声常景洪、第三梅谷、同牡丹、磨露牡丹玉、送春始

見花、斟泉熊白盞、至午忽当茶周彭、天龍寺、第四水無瀨、同流螢、袖拾流螢去、筆跳霜兔真御製、第五

題稚笋子(瑞保)、子雖為禪昌院後、俄自殿下賜紫衣帖如此、故一句一章相統也、進砌錦衣笋子(瑞保)、聖門、第六

同鳴蟬景洪、蟬喧新綠裡、霖霽夕陽收、鷄唱殘燈下、更闌曉漏逾元冲、第七、同梅雨廣橋中、納言、応是昨來

雨、黃樹落有声、堪濡籬畔露、綠草俛相生水無瀨、第八、同愛蓮元冲、禁池蓮賜浴、涼雨竹移園正悟、

第九、同揮扇正悟、一天宜避暑、揮扇薰風、長夏如飛雹、困碁響綺櫳曲臘(極瀾)、第十、同涼月周彭、

涼到入簾月、景佳開画巒周洪(中略)、追加、同清泉周洪、泉滴添琴色、雪清凝玉膚廣橋、追加可有五十句。

云々、雖然百句被仰出、一番之対、楼高響鼓腰云々、雖然百句故対相改也。

(2)文祿一年(一五九四)五月一七日条、斎了侍鳳闕御聯句、雄長老章句曰、騰茂竹台雨、子(瑞保)対、避塵

松蔭涼、百句了以後、千句懷紙歷覽、同字人々々々改正之。

(三)景洪(字英岳、英叔、南禪寺正因庵)

(1)文祿一年(一五九四)四月一六日条△禁中聯句御会▽↓(三)1

(2)文祿一年(一五九四)九月一三日条、早晨赴日野甲第(中略)、御製句曰、節過々陶石、疎籬菊徑荒、子(瑞

保)対曰、道賢々孔子、古曲杏壇芳、即喝食執筆向文台前、主聖曰、可束髮、景洪長老以紙束之也、卅句書

之、聖主曰、筆勢被驚聖眼、御感不斜也(中略)、侍御前衆梅谷・景洪・子(瑞保)也、百句了也。

(3)文祿二年(一五九五)一月八日条△五山月次詩聯句会▽侍聖門(中略)、累刻款々官話、々次及五山聯句之一件也

(中略)、晚來赴松首座、秉燭聯句廿句、圭藏主・岷也、及深更投一宿也。

(4)文祿二年(一五九五)一月一〇日条、早晨赴長得茶湯、富・広・忠庵同伴也、喚印首座(中略)、南禪梅心扇十柄、梅印墨十丁、英岳杉原一束・筆二雙(中略)、及聯句一件也。

(5) 文祿二年（一五九五）三月二五日条 早晨五岳諸老來賁、著座主位龍吟、賓位子（瑞保）、喫齋了、各々休息而著座、聯句始也、辞退衆梅谷・清叔・景洪・菊齡・三章五人也、臨江・昌叱壽命無來駕也。

(6) 文祿三年（一五九六）一月二二日条 南禪・英岳・西堂見惠鳥子紙廿枚・兎穎二对、鳳凰之詩見之也。

(7) 文祿三年（一五九六）一月二五日条 五岳詩聯之会如恒、題鳳凰集京師、自建仁出之（下略）。

(8) 文祿三年（一五九六）三月二五日条 詩聯会如恒、題檐花細雨、破題句、綠新春已暮、何処覓殘紅、洪西堂、对玄圃、紫禁天將曙、博山帶御烘也（下略）。

(9) 文祿三年（一五九六）三月二六日条 往于南禪、問以心、々々出迎、有暮烟、同伴玄圃・梅心・梅印也（中略）、山々四面吹綠、予（瑞保）句云、富景前山綠、風光花不如、主翁对、凝烟沈水炷、世慮穗堪除、至三十句也、夜來梅印・以心・文叔來訪、拳盃及深更也（中略）、同十本・墨五丁英岳送之也。

(10) 文祿三年（一五九六）三月二七日条 早晨於歸雲有齋、於数奇屋調之、英岳・以心・文叔同伴也（中略）、梅印句、為迎葉客駕、春後再回春、予（瑞保）对、依煮草魁茗、塵中屢避塵、十六句而了也。

(11) 文祿三年（一五九六）自二月五日至三月二十七日裏書 月次聯句出座衆、「南禪寺」語心院・悟西堂・沖西堂・洪西堂・伝首座、「天龍寺」禪昌院・彰西堂・寔西堂・彭西堂、「相国寺」鹿苑院・普広院・宥西堂・舜首座・松首座、「建仁寺」兩足院・稽西堂・精西堂、「東福寺」龍吟庵・海蔵院・澄西堂・珊西堂・藤西堂・濟西堂・賢西堂・玄首座・柔首座、以上文祿二年正月五日 民法。

△承璵（字魯雲）

(1) 慶長二年（一五九七）四月一五日条△聯句会▽左・璵為月次聯句東京、齋了先赴東福、欲見秉弘化儀。

(2) 慶長二年（一五九七）一二月二一日条 昨晚沼首座被來、今日歸來、左・璵為明日内会赴東京。

(3)慶長九年（一六〇三）七月七日程△聯句会ヲ玉龍庵ニ興行ス▽齋了出洛、魯雲稚会於龍庵相調、執筆篤子、及申刻相了。

◎宗松（字鶴峯、養春院、賀茂海藏院、住吉慈恩寺）

(1)文祿一年（一五九四）二月二六日程△五山聯句会▽梅甫來也、玕亦來（中略）、祝儀者於富春在之。

(2)文祿一年（一五九四）二月二七日程 自殿下被召、即侍御前、台命曰、五岳文字凋落有嘆、再復旧觀、被回叢社春台望云々、抵頭曰、尤可也、殿下曰、月次聯予詩会、於鹿苑院一会、於東福南昌院一会、而寺隔月可相勤云々

（中略）、可勵學業云々、累年五岳衆不學詩文、徒送光陰曲事也。

(3)文祿二年（一五九五）一月五日程 裁書遣于賀茂松首座、蓋聯句連衆雖加之、松也辭之。

(4)文祿二年（一五九五）二月二〇日程 松首座來過、及住吉^{（公）}事之一件、圭藏主聯句再巡持來也（中略）、往時惟高老師於北山五岳之詩会在之、題紅葉[□]龍也（中略）、晚來赴鹿苑、普請一見也、於門前龍伯・鶴峰來也、廿五日聯會座敷奉行被相尋也。

(5)文祿二年（一五九五）一〇月二日程 沼首座來、聯句一巡持來也、松首座歸洛、密柑百菓賜之^{五岳詩聯之会出頭事、訴于正統、雖然固辭也。}

(6)文祿三年（一五九六）自二月五日至三月二七日裏書 月次聯句出座衆、「東福寺」龍吟庵・海藏院・澄西堂・珊西堂・藤西堂・濟西堂・賢西堂・玄首座・柔首座、以上文祿二年正月五日 民法…↓^{（六）}（11）

(7)文祿二年（一五九五）八月四日程△鹿苑院月次聯句会▽龍伯來過、当月破題之章句被見、对者松首座可為輪次云々、薄暮賀茂將監來、明日能在之。

(8)文祿二年（一五九五）一月八日程△聯句会ヲ催ス▽晚來赴松首座、秉燭聯句廿句、圭藏主・岷也。

(10)慶長五年(一六〇〇)一月八日条△高麗人旅庵ノ詩二和ス▽時高麗人旅来テ賦詩、予(海藏院)和之。

(11)慶長七年(一六〇二)三月七日条△詩聯句▽円光哦一聯佳句、其句云、
桜雪忘寒酒、
对云、
松陰結社詩豊光

得閑鷗夢熟松子、
乘興兔魂奇左公、
滴翠峰添色豊光、
奉黃寺董緇円光、
六句而了ル。

(12)慶長八年(一六〇三)二月二八日条△光源院聯句会▽先至光源院、早各々光駕、聯句卅句至、超藏主執筆、聯中

瑞雲・听英・覚翁・江叔・丘叔・明叟・玄室・予(海藏院)、以上九人(中略)、夕飡聯句了テ点燭受用之。

(13)慶長八年(一六〇三)二月三〇日条△承宏ノ聯句会▽被赴于醍醐山、予(海藏院)亦於有隙者、自今晚可来ト云々

(中略)、自宏首座一書来、来五日六日比可被催聯会ト云々、予隙次第ト云々(下略)。

(14)慶長八年(一六〇三)三月五日条 已刻ニ赴相国寺聯会、於方丈宏首座興行、丘叔・江叔・玄室・听叔・超藏主・

瑞雲、樸侍者執筆□、末尾ニ聯会了夕飡受用。

(15)慶長十一年(一六〇四)一〇月二三日条△承兌ノ霜紅詩ニ和韻ス▽予(海藏院)亦至鹿苑寺、豊光和尚題霜紅有製

作、遠近雲晴山色濃 樹頭翻錦夕陽風 宴遊欲改牧之句 醉面紅於霜後楓 豊光和尚、右和韵。予雖為醉

裏、為稽古題之、山色秋過興尚濃 冬風却暖似春風 々揺葉々映池水 楓化龍耶龍化楓、文嶺并洛甫雖

有尊和、予不見之、故不書之。

(16)慶長十二年(一六〇七)一月六日条 至養春院休息ノ、及暮鴉赴慶雲院、問智泉、携千首座来訪、且閑話、聽

夜半鐘帰院、有一聯、其辞曰、迎客愧無興、寒爐葉為薪、智泉、予拙对吟未了、交朋齊有信、
脱節松依筠(晚) 宗松。

△五山(京都)聯句会

(1)文祿一年(一五九四)一二月二七日条△秀次五山ノ聯句詩会ヲ復興ス▽自殿下被召、即侍御前、台命曰、五岳文

字凋落有嘆、再復旧觀、被回叢社春白望云々、抵頭曰、尤可也、殿下曰、月次予詩会、於鹿苑院一會、於東福南

昌院一会、兩寺隔月可相勸云々、然者為会席料(中略)、可勵學業云々、累年五岳衆不學詩文、徒送光陰曲事也(中略)、即備台覽、章句者龍吟可勸之。…↓(七)↓(1)

(2)文祿一年(一五九四) 一二月二九日条 自殿下被仰出書立也、即一覽也、□赴玄以、五岳之書立來、歷覽矣、玄以曰、書立殿下_江予可令披露云々(中略)、玄以曰、五岳之若輩衆人才不知之、予可相計云々、即侍殿下書立披露之(中略)、雖然五岳諸彦会合陪席末則如何、清叔・瑞雲・舜首座三人聯句席可有出頭、其外者可除之云々、殿下曰、若輩衆為稽固也、可令出座云々。

(3)文祿二年(一五九五) 一月二日条 然者自殿下被仰出月次聯会一巡可在之否云々、予云、始而会也(中略)、然者一巡之句尤可也、即懷紙□備台覽之間、一句可然云々。

(4)文祿二年(一五九六) 一月四日条 侍御前伸禮、殿下曰、去冬聯句人衆書立分、悉雖可令出座、如此在之、則若輩衆借諸老之力、章句_仕对可□甚不可然、所詮為自分、自自己胸襟流出句之徒、聯句席可令出頭之由台命也、予抵頭曰、尤可也、殿下曰、出頭衆於五岳不依老若(中略)、聯会諸式法度以下書之、於殿中與玄以对談(中略)、殿下曰、龍吟章句、予(瑞保)对如何、即書之献矣、予高声誦之也、詩題曰、萬年枝上聽黃鶯、黃鸝語太平、二題書之献之(下略)。

(5)文祿二年(一五九六) 一月六日条 岷也亦來、即於殿中五岳住持衆招之、及聯句一件、即殿下御出座。

(6)文祿二年(一五九五) 一月八日条 侍聖門(中略)、累刻款々官話、々次及五山聯句之一件也(中略)、晚來赴松首座、秉燭聯句廿句、圭藏主・岷也。

(7)文祿二年(一五九五) 一月九日条 五山月次聯句会 即月次題詠詩兩篇一見也、晚來広來也。

(8)文祿二年(一五九六) 二月二〇日条 禪昌院案内者也、二月看花詩各々被見也、往時惟高老師於北山五岳之詩会

在之、題紅葉□龍也。

(9)文祿二年(一五九六)三月二五日条 早晨五岳諸老來賁、著座右位龍吟(中略)、各々休息而著座、聯句始也。

(10)文祿二年(一五九六)八月二三日条 予詩亦見之、來月々次詩題。當寺輪次也、與普広評之。

(11)文祿二年(一五九六)八月二五日条 聯句。席如恒、龍吟以病無出座也、來月詩題評之、依為當時輪次出之。

(12)文祿二年(一五九六)九月一三日条 建仁寺鶴藏主來也、紅柿一折持來、当月々次聯句。章句。暉子補之。

(13)文祿二年(一五九六)九月二五日条 早晨五岳之諸彦來會、各々詩一見、題自東福出之、菊遭而重陽也(中略)、

不陪聯句。席(中略)、來月詩題自龍阜出也、煖爐會也、内會詩題、冬暖如春也。

(14)文祿二年(一五九六)自七月六日至十五日裏書(折紙一ノ面) 関白様御湯治之由、就夫為御音信(中略)、可然様

御取成被頼思召候、委細者□恐惶敬白、真木嶋玄蕃頭 十一月八日 昭光 聯句 竹稚雨無響周暉

松孤月作妝文嶺 僧從鐘默夢正溪 旅以杖隨忙玄室 景暮皈鴉閃菊溪 世平瑞鳳翔川岳 碧梧秋令色李溪

綠萼雪吹香瑞雲 臘味推寒意林叟 電蹄催曉裝周玄 (折紙、一ノ裏) 峯尖知路嶮文 漏滴厭宵長暉

影淡風簾燭室 彩成雲錦裳正 何晴鵲淚蜀川 勝境雁声湘李 絃外泉琴調瑞 綿連潮絮狂林

舟輕生翼覆玄 竿動釣名潢菊 樂只茅庵呂暉 術奇藥局倉文 誰治針耳蟀正 獨羨矢盟鴛室

恨自妾閨涌菊 愁於鰥戸常川 朝榮籬落槿林 日出海中桑瑞 断靄漁歌近文 遠村樵笛揚川

(折紙、二ノ面) 智水難窺底 若村好耐嘗 巷深童指杏 塵說仏拈菖 激陸白頭瀾

入郊爽氣涼 吟遊詩步綾(緩) 聘問履痕彰 兩部蛙饒舌 □參鳥変玩 法雷鳴地濟

武庫罵天洋 若種如来李 化縁円覚楊 侍立阿含羊 □霧蟹簑重 火坑聖籍七

不波儒溺江 及第士掄良菊 蒲劍鈍干莫 (折紙、二ノ裏) 杵碁樂綺黃 鷺飛池後素

蟾上嶺餘光

推暑倩青士

拜宸仰玉皇

負暄農背重

閱歲客心傷

棹唱驚鷗睡

材偉裁豹章

短檐歌帽軾

杳塞奏琵琶

草密徑何在

蘚稠砌已荒

烟叢蛩暗話

乾道象婦藏

破□重関酒

到般若岸航

嬉敖開雅席文

騷會據胡床李

(15) 文祿二年（一五九六）一月一日條

内會聯句在之、周暉頭役也、自日野公四瓶・一籠來、到初更聯句了也。

(16) 文祿二年（一五九六）一月二〇日條

自悟西堂寒爐詩並來月題章句來也、新戒在松為禮來也。

(17) 文祿二年（一五九六）一月二五日條

燒葉詩諸老管見之、南禪沖西堂御鷹山云々、等役不出、兌西堂以病不出

頭、宥西堂俄辭退、聯句了。

(18) 文祿二年（一五九六）一月二七日條

琦碕楚石文字所望之、即一覽、

神從何起遠傳声

大地山河仄耳聽

若是木人知落処

百川□響雷霆

日本忘首座空谷雅号山偈說而美焉

楚石梵碕 印 印 印

(19) 文祿二年（一五九六）一月二五日條

五岳聯會如恒、題者敲水煮茶也。辭退衆兩足・三章・維舟・剛外・文叔也。

(20) 文祿三年（一五九七）一月二五日條

五岳詩聯之會如恒、題鳳凰集京師、自建仁出之（中略）、禪昌・月溪以病辭之。

(21) 文祿三年（一五九七）二月二八日條

自聖門有使、來月初比於金闕可被成和漢（中略）、遣当月詩聯于菊庭右府也。亭

(22) 文祿三年（一五九七）三月二五日條

詩聯會如恒、題檐花細雨、破題句、綠新春已暮、何処覓殘紅、洪西堂、

对玄圃、紫禁天将曙、博山帶御烘也。

(23) 文祿三年（一五九七）三月二五日條

聯會如恒、辭退衆梅心・悦叔・文叔・梅真・集雲五僧也。詩題鳥声惜春。

(24) 文祿三年（一五九七）三月二六日條

山々四面吹綠、予（瑞保）句云、富景前山綠 風光花不如 主翁对 凝

烟沈水炷、世慮穗堪除、至三十句也。

(25) 文祿三年（一五九七）四月五日条 往德芳、有齋、々了往于雲興、蓋内会聯句也、午時古澗來訪。

(26) 文祿三年（一五九七）五月二五日条 聯会。辞退衆惟杏・月溪・惟舟也。

(27) 文祿三年（一五九七）六月二九日条 以心來也（中略）、蓋月次聯句。对持來、侑暮烟也。

(28) 文祿三年（一五九七）七月二五日条 詩聯。如恒、辞退衆仲西堂・彰西堂・寔西堂・両足・天護・月溪・友月・集

雲、八人不出也、古澗・進月・竹溪（卿）三僧云、東福友月貞首座公事、既及大破（中略）、当月題目自惠日出也、蟋蟀俟吟為題也、章句月溪、对以心也。

(29) 文祿三年（一五九七）八月一五日条 來月々次聯句。頭役云々、然者章句代之云々、諾矣。

(30) 文祿三年（一五九七）八月二〇日条 東山進月西堂、來月々次題章句并詩携來、以他出不面也。

(31) 文祿三年（一五九七）自八月二六日至九月一日裏書 一、短冊帑御廻之段、尤可然存候、五山へ從我等廻申事、右之取乱に付、一切不可成候間、小鷹にても何にても可參候。

(32) 文祿三年（一五九七）九月一六日条 自菊亭殿有使、五山月次詩聯有失却、可補之由勅命也云々。

(33) 文祿三年（一五九七）一〇月二二日条 齋了往德芳、蓋内会聯句也、傳西堂詩携來、於南豊対談。

(34) 文祿三年（一五九七）一〇月二三日条 自惠日藤西堂詩并來月々次破題章句來也、自悦叔西堂・文叔、廿五日聯会。可令不出云々。

(35) 文祿三年（一五九七）十一月三日条 往祐徳宅故不面也、東福賢西堂月次句。对輪次也。

(36) 文祿三年（一五九七）十一月四日条 以南禪以連署、（自）太甫西堂・圭首座詩聯。席出座之儀奏于殿下。

(37) 文祿三年（一五九七）十一月二五日条 月次会如恒、辞退衆西咲・三章・梅真・月溪・維舟也（中略）、聯句。席正

統句云、賓ミチヒクイッル二納日イッル之句在之、聽松云、納字納日云々、正統怒而云、納云々、尚書語也。

(38) 文祿三年（一五九七） 二月一日條 五山詩聯會如恒、天龍寺四人懈怠、兩足同前、晚來往大統。

(39) 文祿三年（一五九七） 二月一六日條 於慶雲院月次内會聯句在之、讚藏主頭役也。

(40) 文祿三年（一五九七） 二月二七日條 五山月次詩聯一冊携之、殿下御成于鷹山、詩聯一冊渡與少言而歸也。

(41) 文祿三年（一五九七） 自八月二日至十二日裏書 殿下様方々へ被下、被召連、不得寸隙、以書狀不申上候、一、

來廿五、句會、萬御取紛推量申候（中略）、則上様へも申上候、恐惶敬白、（文祿元年）仲春念 玄隆。

(42) 文祿五年（一五九九） 一月一三日條 五山詩聯衆、自殿下去年自正月至七月御扶助下行之事。

(43) 文祿五年（一五九九） 一月一九日條 去年夏中詩聯衆中、自殿下御下行於二條請取也。

（空）顯暲（初周暲、中暲、字昕叔、本源國師）

(1) 文祿一年（一五九五） 九月一二日條 禁中聯句御會執筆 自日野大納言殿有使、明日可有御聯句、然者周暲入内執筆之旨被仰付云々、返章曰、尤辱次第也、雖然幼年之間堅辭。

(2) 文祿一年（一五九五） 九月一三日條 喝食著紗衣入内、聖帝曰、喝食始而御覽可愛云々、御製句曰、節過々陶后疎籬菊徑荒、予（瑞保）對曰、道賢々孔子、古曲杏壇芳、即喝食執筆向文台前。

(3) 文祿二年（一五九六） 九月一三日條 五山月次聯句會 当月々次聯句章句暲子補之。… ↓（空）(14)

(4) 文祿二年（一五九六） 自七月六日至十五日裏書 聯句（中略）、漏滴厭宵長暲（中略）、樂只茅庵呂暲。

(5) 文祿二年（一五九六） 一〇月一六日條 内會聯句在之、周暲頭役也（中略）、到初更聯句了也。

(6) 慶長一四年（一六〇九） 九月二二日條 智仁親王御所聯句御會 晚炊以後諧八條殿下（智仁親王）、及初更歸 愚也。同廿三日條 惠阜月溪和尚來駕、於梅岑 景蘇・愚也。同廿四日條 早中如常、晚炊以後、持漢和

一巡詣八條殿下、々々萬機之故、不拜尊顏而歸矣、夜伴仙溪・景蘇・愚（顯暲）也。

(7)慶長一四年(一六〇九)一二月一日条△日野第歌会ニ於テ兼題二首当座二首詩▽就唯心軒有歌会、歌人数一員缺之、以故招愚(顯暲)也、賦詩見題二首、其一題者祝言、又早梅、々々詩曰、

愛日和晴野水浜

認來木母暗香新

江南易地南枝上

雪裏橫斜偷却春、

又祝言詩云、

祇今萬國際明時

社舞村歌摠祝釐

十雨五風天澤遍

七月陽旱不曾知、

又当座二首、山雪、又雪似雲、賦山雪曰、

白雪成堆山寺籬

閑僧遊目慰生涯

六花一色松杉上、

興在黃昏映月時、

題雪似雲云、

欄上吹來四面風

貪看寒景日將終

遠眸難辨雲邪雪

山色冥濛積靄中。

(8)慶長一七年(一六一二)四月二三日条△智仁親王御所詩歌御会▽齋了赴于八条殿下(智仁親王)歌会之席、詩歌罷有舞、々之後、於花圃帙筵而淺斟低唱(中略)、愚(顯暲)也探題夕納涼之詩曰、

為避炎蒸傍一池

塵心洗尽碧漣漪

晚來吟步納涼処

賡載少陵荷葉詩、

云々、四句杜詩荷淨納涼時之

心也、又寄書恋詩曰、

却恨初歡憂患初

別來違約過居諸

筆頭雖秃言難尽

洒淚幾回裁艷書矣。

(9)慶長一八年(一六一三)四月四日条 午刻八条殿下詩歌之席、探題也、即席曰予(顯暲)三首作也、聞郭公、

蜀魄思歸勸客不

声々啼到漏更遒

杜鵑常有兩般意

月夜聽声雨夜愁、

寄道祝、

大行政道慰望群

四海砥今仰聖君

滿尽扶桑恩霈□

半欣舜雨半堯雲、

新秋雨、

苦雨遠檐驚聽鳴

孤燈明滅夢難成

新秋一滴憂患始

從此爭禁夜々情。

(10)元和一年(一六一五)自二月二十二日至三月十日裏書 八条宮様為仰申入候(中略)、仍來十日に詩□之御会被成

御催候間(中略)、為其如此候、恐々頓首、大弼 極月六日 鹿苑院殿。

(11) 元和三年（一六一七）四月五日条 齋了赴八条殿下。詩歌之席、庭前芍藥爛熳、詩歌共一首充也、予（顯暉）得寄書恋之題曰、夜々空床碎鐵肝 惱離情□話情難 硯池疑是變愁海 宴淚裁染不乾。

(12) 元和五年（一六一九）二月二日条 齋後赴八条殿、□十題之詩草案、不二集雲老師亦持詩來。

(13) 慶長一七年（一六一二）一〇月一日条 自慈照院豊国和漢懷紙請予（顯暉）、入韵故、到慈照而談合。

(14) 慶長一八年（一六一三）一月一〇日条 富春軒聯句会 共舜岳赴富春之請、聯句者十句、舜岳破題曰、

鶯亦陸前世舜岳

無梅不化身同

鳳兮丘至道某

於芸必依仁仁

踏實常趨訓如天

結交竟飲醇雪溪

雲衣山白飾某

午枕垓昏姻舜

涼意望槐雪

春吟試筆新天

十句而終章、舜岳亦歸去矣。

(15) 寬永六年（一六二九）八月二二日条 勅題新涼試燈ノ詩ヲ上ル 勅題新涼試燈、有節老師・予（顯暉）各製兩首獻之、御製亦有尊詩兩首、於御前有詩之評（中略）、翌日詣禁裡、伸昨日之御禮。

(16) 寬永七年（一六三〇）一〇月八日条 本光国師（顯暉）今朝光賁于慈照院、午刻光降于当軒（中略）、言句者二十句。

(17) 寬永八年（一六三一）一月五日条 自大寧院賜上句、請予（顯暉）对。

(18) 寬永八年（一六三一）一月六日条 都侍者言上句、二十句而徹撤、初更過而歸軒。

(19) 寬永八年（一六三一）一月一〇日条 午刻請晴雲和尚・玉室西庵・仁英西庵・雲峯・騫叔・言句者二十句。

(20) 寬永八年（一六三一）一月一八日条 午刻赴于富春、晴雲和尚來臨、有聯句十六句。

(21) 寬永八年（一六三一）五月二四日条 後水尾院北野社法樂御製ノ詩ヲ評シ奉ル 雲興雪岑西庵為仙洞御使、携明日聖廟法樂尊作來、命予（顯暉）評之、予以卑牘呈愚意、午刻詣八条親王尊君。

(22) 寬永一〇年（一六三三）七月一二日条 仙洞聯句御会 赴仙洞御聯句御会、先以十帖・一本伸御禮、午時休息之

時、五山伺候之衆（中略）、御聯句了、逼暮賜晚食、々了退出、黄昏之時分也。

(23) 寬永一二年（一六三五）七月一八日条 自仙洞聯句御懷紙、東福寺虛白堂上句也、拙（顯暲）対可綴之尊命也。

(24) 寬永一二年（一六三五）八月二日条 宿忌始、中峯国師年忌十四日依仙洞御聯句、明日預設齋也。

(25) 寬永一二年（一六三五）八月一四日条 伺候仙洞、予遲、皆已侍御前、御聯句始、予（顯暲）破題之対（中略）、聯句申之終刻畢功。

(26) 寬永一二年（一六三五）一月二四日条 今日有仙洞之召故（中略）、則乘伺候仙洞、召入座、接家^{（撰）}・親王・門迹有之、予（顯暲）侍座。

(27) 寬永一二年（一六三五）一月二八日条 早朝侍仙洞御聯句之席、不知韻、俄御会也、及夜半過百句了。

(28) 寬永一三年（一六三六）四月一七日条 喫齋、赴仙洞御聯句之会、入夜六十句而退出。

(29) 寬永一三年（一六三六）四月十八日条 齋了院參、為昨日御聯句了畢也、申終時分百句了畢。

(30) 寬永一三年（一六三六）五月七日条 赴齊于八条殿、雪岑西庵來臨、達仙洞尊命曰、千句御会來十一日、一巡章句入韻有御定（中略）、特拙僧（顯暲）久不侍漢和之漢之席之儀、聖慮有御存知雖被仰（下略）。

(31) 寬永一三年（一六三六）六月一四日条 今日四百韻、昏黃以後畢功、今日御会之中、各賜薰衣袋。

(32) 寬永一三年（一六三六）六月一五日条 今日三百韻、追暮而終、御会欲終之時分（中略）、次公家衆僧衆各金子五兩拜領、追加漢和面八句、章句者達長老被申上、御製又院參之衆也（中略）、追加亦執筆拳唱連衆皆在座。

(33) 寬永一三年（一六三六）九月二日条 仙洞御千句、漢和之漢之句面々点之、予（顯暲）句有所改。

(34) 寬永一三年（一六三六）九月二日条 千句予（顯暲）所改（中略）、雪岑伺候于仙洞可窺云々。

(35) 寬永一四年（一六三七）一月二九日条 今日仙洞御聯句（中略）、会晡時了畢、三千句畢云々。

(36) 寬永一五年（一六三八）一〇月一七日程 添菜如恒、雪岑西庵報廿日仙洞御聯句。

(37) 寬永一五年（一六三八）一〇月二〇日程 喫細米粥而伺候于仙洞、今日五岳之衆多、二更以後了。

(38) 寬永一六年（一六三九）一月二九日程 伺候于仙洞御會、予（顯暲）少遲（中略）、初更以前百句了矣。

(39) 寬永一一年（一六三四）十一月一〇日程 鹿苑寺聯句會 齋後徒步而與瑞藏主・三藏主・威藏主・吉首座赴北山

鹿苑寺（中略）、主翁言上句、談美磨冬愛、予（顯暲）對曰、典存匡旧規、四五句出而、磨與規同韻見

出、雖然、綴句故不改之、當座之句者同韻亦不苦、句十句而了。

(40) 寬永一六年（一六三九）三月二五日程 近衛第聯句會 朝赴陽明若御所聯句御會、辭退多而聯衆六人也、御會席

丁寧也。

(41) 寬永一九年（一六四二）八月一三日條 中秋詩會 一昨日中秋詩題武藏野見月、道春法印題評而出。

(42) 寬永一九年（一六四二）八月一五日程 今日於文殊院有三五明月之會、五岳之衆・道春法印皆赴之、故有理今日

休息也、予（顯暲）也草臥故辭之不赴矣。

（癸）元冲（字、初海印、後梅印、語心院）

(1) 文祿一年（一五九五）四月一六日程 禁中聯句御會 早晨侍鳳闕（中略）、今日千句御會章句之定也、聯句百韻在之、於

禁闕御千句之次第（中略）、第六 同鳴蟬景洪 蟬喧新綠裡 霖霽夕陽収 鷄唱殘燈下 更闌曉漏迢元冲 ↓ (1)

(2) 慶長八年（一六〇三）四月六日程 一昨四日、於禁中雅會（中略）、於南禪者玄甫・梅印而老、聯句無一巡（中

略）、出章句、破題之闈梅印被取之下 章句及韻卜有直綻勅、此故梅印、紅葉亭塔新（下略）。

(3) 文祿一年（一五九五）九月一九日程 聯句 牧庵來也、一聯興行云々、句曰、不言詩可俗、八月々中梅、對南禪

寺冲西堂也、堪採葉伝術、三山々上菜云々、自五岳大閣仁御音問（下略）。

(4) 文祿二年（一五九六）二月一九日条 自南禪梅印西堂來訪、蓋二月看花之詩持來（中略）、三重韻一冊被惠也。
 (5) 文祿二年（一五九六）二月二〇日条△二月看花詩▽二月看花詩各々被見也、往時惟高老師於北山五岳之詩会在之、題紅葉□龍也。

(6) 文祿二年（一五九六）九月二二日条△楓葉詩▽瑞雲來也、楓葉之詩見之（中略）、自沖西堂楓葉詩來也、西山彭西堂來、当月十字句一覽。

(7) 文祿二年（一五九六）一月一日条△五山月次聯句会▽自沖西堂有狀、当月聯句對來（下略）。

(8) 文祿三年（一五九七）自二月五日至三月二七日裏書 月次聯句出座衆「南禪寺」語心院・悟西堂・沖西堂・洪西堂・傳首座、「天龍寺」禪昌院・彰西堂・寔西堂・彭西堂（下略）…↓(6)↓(11)

㊦ 鹿苑院

(1) 文祿一年（一五九五）七月一八日条△聯句会▽於鹿苑聯句資始、蓋為少年稽古也、自中村或却花所望使來、遣也、聯句了。

(2) 文祿一年（一五九五）一二月二七日条△五山聯句会▽自殿下被召、即侍御前、台命曰、五岳文字凋落有嘆、再復旧觀（中略）、殿下曰、月次聯予詩会、於鹿苑院一会、於東福南昌院一会、兩寺隔月可相勤云々、然者為会席料、一会五石充可被出之云々、即十石充雖可被出之、過分仁在之（中略）、可勵學業云々、累年五岳衆不學詩文、徒送光陰曲事也。

(3) 文祿二年（一五九六）九月一三日条 建仁寺鶴藏主來也（中略）、当月々次聯句章句暁子補之。

(4) 文祿二年（一五九六）九月二五日条 早晨五岳之諸彦來会、各々詩一見、題自東福出之、菊遭兩重陽也（中略）、不陪聯句席、諸老婦駕之時、出座送之也、來月詩題自龍阜出也、煖爐会也、内会詩題、冬暖如春也。

(5) 文祿二年（一五九六）一〇月二日条 沼首座來、聯句一巡持來也、松首座歸洛、密柑百菓賜之五岳詩聯之會出頭事、訴于正統、雖然固辭也。

(6) 文祿二年（一五九六）一〇月四日条 自養源以順首座云、昨午歸寺、当月五岳之詩聯雖可致出頭（下略）。

(7) 文祿二年（一五九六）十一月一日条 当月聯句對來（中略）、蓋自蔭涼・鹿苑也。

(8) 文祿二年（一五九六）十一月二五日条 五岳聯會如恒、題者敲氷煮茶也、辭退衆兩足・三章・維舟・剛外・文叔也。

(9) 文祿二年（一五九六）十二月一日条 於南昌五岳聯會、以病辭之、詩題蓬萊會也。

(10) 文祿三年（一五九七）一月二五日条 五岳詩聯之會如恒、題鳳凰集京師、自建仁出之。

(11) 文祿三年（一五九七）三月二五日条 師聯會如恒、題檐花細雨、破題句、綠新春已暮 何處覓殘紅、洪西堂（下略）。

(12) 文祿三年（一五九七）三月二五日条 聯會如恒、辭退衆梅心・悅叔・文叔・梅真・集雲五僧也、詩題鳥聲惜春。

(13) 文祿三年（一五九七）三月二六日条 往于南禪、問以心（中略）、予（瑞保）句云、富景前山綠 風光花不如、主

翁對、凝烟沈水炷、世慮穗堪除、至三十句也、夜來梅印・以心・文叔來訪。

(14) 文祿三年（一五九七）四月五日条 往德芳（中略）、蓋內會聯句也、午時古澗來訪。

(15) 文祿三年（一五九七）五月二五日条 聯會辭退衆惟杏・月溪・惟舟也。

(16) 文祿三年（一五九七）七月一八日条 南禪寺傳西堂來月章句持來（下略）。

(17) 文祿三年（一五九七）七月二五日条 詩聯如恒、辭退衆冲西堂・彰西堂・寔西堂・兩足・天護・月溪・友月・集

雲、八人不出也、古澗・進月・竹溪（卿）三僧云（中略）、当月題自惠日出也、蟋蟀俟秋吟為題也、章句月溪、對以心也。

(18) 文祿三年（一五九七）九月二四日条 自南禪文叔・春育兩僧詩中書來、晚間惠日剛外詩携來。

(19) 文祿三年（一五九七）九月二五日条 詩聯如恒、辞退衆正統・月溪・集雲・惟舟・玄圃・悦叔・三章也。

(20) 文祿三年（一五九七）九月三〇日条 往于印首座、蓋月次聯句之内会也、於富春少年入寺。

(21) 文祿三年（一五九七）一〇月二日条 午時東福藤西堂柿一籠携来、蓋月次聯句破題対一見、絶作也。

(22) 文祿三年（一五九七）十一月二五日条 月次会如恒（中略）、聯句席正統句云、賓^{ミチビキツル}納^{イッル}日之句在之、聽松云、納^{イッル}字納^{イッル}日云々、正統怒而云、納^{イッル}云々、尚書語也、重而可考之也。

(23) 文祿三年（一五九七）六月一九日条△聯句会扶助米▽自殿下聯句衆中御扶助、自松勝切手来。

(24) 文祿三年（一五九七）七月一九日条 自松勝之詩聯会席料八木（中略）、自南昌行者来、南昌^江十石充、当院^江十石充、都合廿石也、松勝切手廿石也。

〔尙崇伝（字以心、本光国師 牧護庵金地院）

(1) 文祿二年（一五九六）一月二日条△五山月次聯句会▽使僧曰、以心来廿日遷寮、然者自殿下被仰出月次聯会一巡可在之否云々、予（瑞保）云、始而会也（中略）、然者一巡之句尤可也。

(2) 文祿三年（一五九七）七月二五日条 詩聯如恒（中略）、当月題自惠日出也、蟋蟀俟秋吟為題也、章句月溪、対以心也。

(3) 文祿三年（一五九七）九月一六日条 自菊亭殿有使、五山月次詩聯有失却、可補之由勅命也云々。

(4) 文祿三年（一五九七）十一月二日条 往于道可宅、有茶、富春同伴、南禅以心・圭首座携詩来（中略）、東福竹蹊^卿月次章句詩一覽。

(5) 文祿三年（一五九七）自二月五日至三月一七日裏書 月次聯句出座衆、「南禅寺」語心院・悟西堂・冲西堂・洪西堂・傳首座、「天龍寺」禅昌院・彰西堂・寔西堂・彭西堂（下略）…↓〔六〕-〔11〕

(6) 慶長五年（一六〇〇）四月一日条△歸雲院ノ詩会▽斎了赴南禅歸雲院、短冊見物、主位聽松和尚、次二太甫陽^泰

長老之次西堂衆、其次平僧、賓位悟心和尚、其次梅心西堂、其外西堂衆次第不列、詩之出題、東坡南禪賞芍藥
図、引合二書テ、主位ノ屏風ニ推之（下略）。

(7)寛永七年（一六三〇）一〇月八日条△顯暁卜聯句▽本光国師今朝光賁于慈照院、午刻光降于当軒（中略）、言句者二十句。

（宛）令彰（字三章、妙智院）

(1)文禄二年（一五九六）三月二五日条△五山月次聯句会▽早晨五岳諸老來賁、著座主位龍吟、賓位子（瑞保）（中略）、聯句始也、辞退衆梅谷・清叔・景洪・菊齡・三章五人也、臨江・昌叱・壽命無來駕也。

(2)文禄二年（一五九六）一二月二五日条 五岳聯会如恒、題者敲氷煮茶也、辞退衆兩足・三章・維舟・剛外・文叔也、自梅心西堂舶煤五丁賜之也。

(3)文禄三年（一五九七）七月二五日条 詩聯如恒、辞退衆冲西堂・彰西堂・寔西堂・兩足・天護・月溪・友月・集雲、八人不出也（下略）。…↓(17)

(4)文禄三年（一五九七）一二月二五日条 月次会如恒、辞退衆西咲・三章・梅真・月溪・維舟也（下略）。…↓(22)

(5)文禄三年（一五九七）自二月五日至三月二七日裏書 月次聯句出座衆（下略）。…↓(11)

（白）承良（字文嶺、心華院）

(1)文禄二年（一五九六）二月一八日条△聯句会▽岷也・良藏主來也、求聯句点削、挑燈累刻清話也（下略）。

(2)文禄二年（一五九六）自七月六日至一五日裏書 聯句 竹稚雨無響周暁 松孤月作妝文嶺（中略）、峯尖知路嶮

文 漏滴厭宵長暁（中略）、 樂只茅庵呂暁 術奇藥局倉文（中略）、 断靄漁歌近文 遠村樵笛揚川（中略）、

到般若岸航 嬉敖開雅席文 騷会據胡床李。…↓(14)

(七) 南昌院

(1) 文祿二年（一五九五）一二月二七日条△秀次ノ獎勵ニヨリ五山月次聯句会ヲ興行ス▽自殿下被召、即侍御前、台命曰、五岳文字凋落有嘆、再復旧觀、被回叢社春台望云々、抵頭曰、尤可也、殿下曰、月次聯（并）予詩会、於鹿苑院一会、於東福南昌院一会、兩寺隔月可相勤云々、然者為会席料、一会五石充可被出之云々、即十石充雖可被出之、過分仁在之、則以往守天下者可略之、輕則於季世亦可準之、為後鑑之間五石充云々、學問相嘖輩者、為御扶助、長老衆三人之飯費、長老以下者到西堂・平僧、飯米二人充可被遣之間、可勵學業云々、累年五岳衆不學詩文、徒送光陰曲事也、於以往者、學問勤之衆於小寺領、不學衆大寺領引替之可遣云々、即往玄以甲第品論嚴命也、於玄以評之、五ヶ条調之、即備台覽、章句者龍吟可對之、對者可補之云々。

(2) 文祿二年（一五九六）二月一七日条 善隣月忌如恒（中略）、蔭涼江添人遣也、即台帖渡與于使僧也、上江十五石之官錢者南昌院江引合遣也、蓋為聯句料如此也（下略）。

(3) 文祿二年（一五九六）二月二〇日条 圭藏主聯句再巡持來也（中略）、往時惟高老師於北山五岳詩会在之、題紅葉□龍也（中略）、二月詩被相携也、晚來赴鹿苑（中略）、於門前龍伯・鶴峰來也、廿五日聯句（下略）。

(4) 文祿二年（一五九六）三月二四日条 以三力赴東福、先問月溪西堂（中略）、即刻到南昌投一宿（中略）、月溪來過、詩一覽、東福衆各々來過、詩管見之、予（瑞保）詩二首綴之、題二月步月也（下略）。

(5) 文祿二年（一五九六）三月二五日条 早晨五岳諸老來賁、著座主位龍吟、賓位子（瑞保）、喫齋了、各々休息而著座、聯句始也。

(6) 文祿二年（一五九六）八月二五日条 評点声報秋之詩也、往于南昌院、諸彦來会矣、人々箇々一覽詩而已、聯句席如恒、龍吟以病無出座也、來月詩題評之、依為當寺輪次出之、以秋日海棠題之、西腋梧桐者内会之題也。

(7) 文祿二年（一五九六）九月二二日条 楓葉之詩一覽、悦叔西堂詩亦來也、自建仁殿下江御進物來、ユガケ五具、南昌帶二筋也。

(8) 文祿二年（一五九六）九月二四日条 裁書遣于惠日、廿五日聯會辭退、蓋腹中相煩故也（中略）、和漢第五予（瑞保）章句也（中略）、自悟西堂詩來也。

(9) 文祿二年（一五九六）九月二五日条 惠日月次聯會以病辭之、普広并瑞雲辭退也。

(10) 文祿二年（一五九六）九月二五日条 早晨五岳之諸彦來會、各々詩一見、題自東福出之、菊遭而重陽也、予（瑞保）以沈痾齋相伴欠之、不陪聯句席（中略）、來月詩題自龍阜出也、煖爐會也、内會詩題、冬暖如春也。

(11) 文祿二年（一五九六）九月二六日条 往于鹿苑（中略）、自歸雲当月破題章句對□也。

(12) 文祿二年（一五九六）一〇月二日条 沼首座來、聯句一巡持來也、松首座歸洛、榴柑百菓賜之五岳詩聯之會出頭事

(13) 文祿二年（一五九六）一〇月四日条 自養源以順首座云、昨午歸寺、当月五岳之詩聯雖可致出頭（下略）。

(14) 文祿二年（一五九六）一〇月二三日条 南昌院今日被侍御前、台劄案書調之（中略）、自南禪寺内會衆來也、今年内會出座衆、今更不出頭（中略）、裁書遣于南昌問歸寺也。

(15) 文祿二年（一五九六）一〇月二〇日条 自悟西堂寒爐詩並來月題章句來也、新戒在松為禮來也。

(16) 文祿二年（一五九六）一〇月二五日条 即赴東福南昌也（中略）、燒葉詩諸老管見之（中略）、聯句了。

(17) 文祿二年（一五九六）一二月二五日条 五岳聯句如恒、題者敲冰煮茶也、辭退衆兩足・三章・維舟・剛外・文叔也。

(18) 文祿二年（一五九六）一二月一〇日条 於南昌五岳聯會、以病辭之、詩題蓬萊會也。

(19) 文祿三年（一五九七）二月二八日条 遣当月詩聯于菊庭右府也、今日殿下遷駕于大坂。

(20) 文祿三年（一五九七）三月二四日条 即往于南昌院、主翁出迎、蔭涼同途（中略）、月溪來訪、評詩也。

- (21) 文祿三年（一五九七）三月二五日程 殿下御成于宇治云々（中略）、詩聯會如恒、題檐花細雨（下略）。…↓(四)↓(22)
- (22) 文祿三年（一五九七）七月二五日程 詩聯如恒（中略）、八人不出也、古澗・進月・竹溪三僧云、東福友月貞首座公事、既及大破（中略）、当月題自惠日出也、蟋蟀俟秋吟為題也、章句月溪、對以心也。
- (23) 文祿三年（一五九七）八月二五日程 往于惠日、聯會如恒、辭退衆聽松、蓋下園于丹陽也。梅心・春育・菊齡・西咲・清叔六員辭退也、雅會了、則赴于常樂、正統・天護・古澗・進月・蕉庵・集雲同座。
- (24) 文祿三年（一五九七）一〇月二四日程 印首座來、有齋、瑞雲來過、廿五聯句執筆之一件也、命壽鑑裁書遣南昌院、明日聯句席以病辭之。当月辭退衆西咲・清叔・英岳・悅叔・文叔也。
- (25) 文祿三年（一五九七）一〇月二五日程 南昌聯句會以病辭退也。
- (26) 文祿三年（一五九七）自八月二日至一二日裏書 一、來廿五、句會、萬御取紛推量申候。
- (27) 文祿三年（一五九七）六月一九日程△聯句會扶助米▽自殿下聯句衆中御扶助、自松勝切手來、於藥院代官所請取也、自正月至六月也。
- (28) 文祿三年（一五九四）七月一九日程 自松勝之詩聯會席料八木、於藥院代官所請取也、自南昌行者來、南昌江十石充、当院江十石充、都合廿石也、松勝切手廿石也。
- (29) 文祿三年（一五九四）二月五日程 自南昌狀來、蓋自博陸御扶助之一件、松勝江之折紙也、瑞雲來也。
- (卅) 秀次（羽柴中納言、江州）
- (1) 文祿一年（一五九二）二月二七日程△五山聯句會ヲ復興シ扶助料ヲ給ス▽自殿下被召、即侍御前、台命曰、五岳文字凋落有嘆、再復旧觀（中略）、殿下曰、月次聯并予詩會、於鹿苑院一会、於東福南昌院一会、兩寺隔月可相勤云々、然者為會席料、一会五石充可被出之云々（下略）。…↓(七)↓(1)

(2) 文祿一年（一五九二） 一二月二九日条 自殿下被仰出書立也、即一覽也、□赴玄以、五岳之書立來、玄以曰、書立殿下_江予（瑞保）可令披露云々、予固辞再三、玄以曰、時侍殿下可備台覽云々、玄以曰、五岳之若輩衆人才不知之、予可相計云々、即侍殿下書立披露之、予曰、當寺衆若輩衆書立之學問相噴仁也、雖然五岳諸彦會合陪席末則如何、清叔・瑞雲・舜首座三人聯句。席可有出頭、其外者可除之云々、殿下曰、若輩衆為稽固也、可令出座云々、抵頭曰、辱葉袞之榮也、殿下曰、為扶助。東堂_仁三人充飯費、東堂以下二人被仰付也。

(3) 文祿二年（一五九三） 一月四日条 侍御前伸禮、殿下曰、去冬聯句。人衆書立分、悉雖可令出座、如此在之（中略）、予（瑞保）抵頭曰、尤可也、殿下曰、出頭衆於五岳不依老若（中略）、詩題曰、萬年枝上聽黃鶯、黃鸝語太平、二題書之獻之、殿下曰、語太平之題可然云々、即虎岩西堂同輿赴玄以甲第、自五山聯會出頭衆評之。

(4) 文祿二年（一五九三） 一〇月一四日条 殿下聯句。衆中御下行八木、於宮木宅請取之也。

(5) 文祿三年（一五九四） 六月一九日条 自殿下聯句。衆中御扶助、自松勝切手來、於藥院代官所請取也。

(6) 文祿三年（一五九四） 七月一九日条 自松勝之詩。聯會。席料。八木、於藥院代官所請取也。…↓(七)―(28)

(7) 文祿三年（一五九四） 一二月六日条 早天順首座遣于松勝、御下行之一件也（中略）、天龍・南禪・建仁・東福遣狀、御扶持之儀也。

(8) 文祿三年（一五九四） 自八月二日至一二日裏書 一、來廿五、句會、萬御取紛推量申候、一、去月廿五日入目筭申候へハ、五石之外。入申候、中々殿下様へ御筭用上不申候。

(9) 文祿五年（一五九六） 一月一三日条 五山詩聯衆、自殿下去年自正月至七月御扶助。下行之事、松勝_江以書立（中略）、下行之切手_{五山}請取也。

(10) 文祿五年（一五九六） 一月一九日条 去年夏中詩聯衆中、自殿下御下行二条請取也、二石六函七器也。

〔吉〕集総（字龍伯、瑞春院）

(1) 文禄二年（一五九三）二月二〇日条△五山聯句会▽晚来赴鹿苑、普請一見也、於門前龍伯・鶴峰来也、廿五日聯句。座奉公被相尋也、自悟西堂英藏主為使。

(2) 慶長二年（一五九七）二月二二日条△月次聯句会ノ頭役▽東京月次、瑞春総首座作頭役、一昨日欵。

〔凶〕周圭（字玄室、光源院）

(1) 文禄一年（一五九二）五月二七日条 殿下御成于尾州也、禪昌来也、侑盃、圭藏主・英藏主聯句再巡持来。

(2) 文禄一年（一五九二）九月一五日条 晚来往鹿苑、道堂僧非時展待丁々寧々、圭藏主来会（中略）、往德芳、見庭前菊花、雨餘紅白相交、驚見眼也。

(3) 文禄一年（一五九二）二月二〇日条△聯句会頭役▽圭藏主尋訪問、月次聯句会廿三日可催云々、諸矣。

(4) 文禄一年（一五九二）二月二二日条 赴圭藏主頭役月次聯句会、蓋於光源在之、午時雲門（中略）、聯句了宴遊。

(5) 文禄一年（一五九二）二月二八日条△五山聯句会▽蓋自殿下被仰出於寺中、学問相噴衆中令書立也、清叔、瑞雲・舜・松・圭・良・直七人也。為使瑞雲・相首座往于民法。△二七日条 殿下曰、月次聯句予詩会（中略）、学問相噴輩者、為御扶助。

(6) 文禄二年（一五九三）二月二〇日条 圭藏主聯句再巡持来也（中略）、二月看花詩各々被見也、往時惟高老師於北山五岳之詩会在之、題紅葉□龍也。…↓〔凶〕(4)

(7) 文禄二年（一五九三）自七月六日至一五日裏書 聯句 竹稚雨無響 周暉 松孤月作妝 文嶺

僧從鐘默夢 正溪 旅以杖隨 玄室 景暮皈鴉閃 菊溪 世平瑞鳳翔 川岳 碧梧秋令色 李溪 緣萼雪吹香 瑞雲

臘味推寒意 林叟 電蹄催曉裝 周玄 峯尖知路嶮 文 漏滴厭宵長 暉 影淡風簾燭 室 彩成雲錦裳 正